

---

# **IS - インフィニット・ストラトス - 三種のISを操る者 アナザーエピソード**

岩田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS・インフィニット・ストラトス -三種のISを操る者 アザーエピソード

### 【Zコード】

N3273X

### 【作者名】

岩田

### 【あらすじ】

姉は優秀だったが、妹の私は能力が低いために欠陥品と呼ばれ、それによって施設から追放された・・・絶望の淵にいる私に一人の男性が私の前に現れ、こう言った・・・『力が・・欲しいか?』  
と・・・。

IS・インフィニット・ストラトス -三種のISを操る者の外伝ストーリーに当たる話です。IS学園での話はほとんどない、ほぼオリジナルストーリーですが、正伝からのキャラクターも時々出来ま

४०

## プロローグ

私の存在理由は・・・なんだろう・・・

ただ戦うために生み出された存在・・・それだけだろうか・・・

でも、事実はそれだけだった・・・

私の名前は・・・『ティファ・ボーデヴィッヒ』・・・以前の  
名前は遺伝子強化試験体C-0038・・・私より前のC-00  
37・・・『ラウラ・ボーデヴィッヒ』とは双子の姉妹として一緒  
に生まれた・・・。

・・しかし、実際のところ私たちに『えられる名前と言つのはただ  
の判別番号みたいなものだ・・・特別な意味はない・・・ただの記  
号・・・

それに・・・双子の姉妹と言つるのは事実だが・・・人のぬくもりを  
感じて生まれたのではなく、受精卵時の遺伝子をいじられて、鉄の  
子宮から・・・私たちは生まれた・・・

双子といつこもあり、私たちの姿は瓜二つといつも並んでつくり

だつた。

性格は一緒ではなかつたが、それでも私たちは自身の目的のために訓練に励むのだつた・・・

しかし・・・双子の私たちにある大きな違い・・・それは・・・『性能』だつた・・・

ある日のこと・・・

「お願いです！その判断だけはやめて下さい。彼女はまだ今後伸びますから・・・」

「・・・その君が言つ今後伸びると言つのは聞き飽きたね・・・。そうやつていつまであの『欠陥品』を置くつもりなのかね？・・・こちらとしては人員維持だけでも大変なんだがねえ・・・」

とある施設の事務所では、教官らしき人物と施設の所長が話していった・・・。

「まだ彼女の力は今後大きく発達しますから・・・どうかチャンスを・・・」

「だめだ・・・そもそも、その欠陥品の姉は十分な能力を發揮しているのに、なぜ妹は全然能力を發揮しないのかね？双子だと言うのに・・・」

口論の内容は『ティファ・ボーテヴィッヒ』の今後どうするかについてだつた。・。ティファはどういうことか強化を施し多分の能力を發揮できないと言う欠点が出て、『欠陥品』といわれており、施設では問題になつてゐる。・。

「だから何度も説明している通り、双子だから同じとは限らないんです。双子はクローンじゃないんですよ」

「・・・君が何と言おうが・・・どの道あの『欠陥品』の処分はこちらで決めさせてもうう。・・・まあ、結果は処分だらうがな」

と、所長らしき人物はタバコを吸つて、煙を吐く。

「そ、それはあまりにも残酷すぎます！完全な結果が出ていないにも関わらず・・・！」

「・・・私こそ何度も言つているがね・・・」こちらも人員維持で精一杯なのだよ。欠陥品を匿うほどの余裕はないのだよ

「くつ・・・」

「それに、どうしてそこまであの欠陥品に期待を込めているのかね？君の管轄部署にはこの施設最強の称号・・・『レジョンド』を持つやつがいるじゃないか」

「そ、それは・・・」

「・・・もういい・・・下がりたまえ・・・どの道結果を期待しても、処分の結果だらうな・・・」

「・・・・・」

そして教官らしき人物は事務所を出た・・・・・

その後、私に通達されたのは・・・・・廃棄処分だった・・・・・。

つまり・・・・この施設からの追放だった・・・・・

私は車から降ろされた。  
私は目隠しをされた状態で車に乗せられ、施設から遠く離れた場所で、

それから目隠しを取ると、目の前には荒れ果てた地面が一面に広がっていた・・・・・

私はだた歩き続けた・・・・・。

何を求めているわけでもなく・・・ただ、歩いていた・・・・・

しかし、時間が経つにつれ、身体の疲れはたまり、腹は減つて、喉が渴いた・・・・・しばらくして・・私は地面に倒れた・・・・・

私は・・・どうなるの・・かな・・

ティファは少し先のことを考える・・・。

あれから何も食べていないので、このまま倒れたままだつたら、数日で餓死に至る・・。

それ以前に脱水症状を起こし・・・そのまま水分が無くなつて死に至るか・・・その二つが予想する今後だつた・・・

姉さん・・・どうして・・私たちって・・・いつも違うのかな・・・

ティファは乾ききつた声で、ここから届くはずもない施設にいる姉に問いかけた。

人は違う・・・そういうものなんだね・・・双子だからつて・・同じなわけはない・・・

そして、涙を流す・・・

もし・・・・私に・・・力があつたら・・・・こんなことに・・・ならなかつたのかな・・・

ティファは自分の無力を憎むのだった・・・

力が・・・欲しい・・・誰か・・・力を・・・

ティファは心の中でそう願い、目を閉じた・・・

なら、力を・・・貰うか・・?

「・・・え・・?」

ティファはゆっくりと顔を上げた。

前には、一人の男性がいた。

「・・・その願い・・・叶えてやるよ・・・」

「・・・・・・」

ティファはその言葉を聞くと、気を失つた・・・

## プロローグ（後書き）

IS・インフィニット・ストラトス・三種のISを操る者と同時に掲載していくますが、こちらもよろしくお願いします。

## Story1 出会い

「へ、ひ…」

ティファは気がついて田が覚めた…

「…」

まず田に映ったのは、コンクリートの天井であった。

そしてティファは半身を起こして、辺りを見回す。

そこはある一室で、色々と機材があった。

ティファが寝てこるのはどうもベッドと言うよりはテーブルの上に布団を敷いたと言ひ感じであった。

「気がついたか」

と、声がしてティファは振り向いた。

そこには一人の男性がいた。

赤っぽい茶色の髪をして、ストレートにしてあった。左目に眼帯を

しており、顔立ちから二十代後半と思われる。服装は赤いコートと言つ感じだが、どちらかといえば軍服と見える。

「あ、あなたは……？」

「……俺の名前は『ロイ・ラングレン』……影ながら活躍する科學者や」

「……科学者……？」

「ああ……それで、君の名前は？」

「……『ティファ・ボーデヴィッヒ』……」

「ティファか……いい名前だな」

「……名前と言つても……それはただの判別記号みたいなものですね……」

「……わうか……」

「……私……どうなったのですか？」

「荒野のど真ん中で行き倒れているところに、俺が助けたよ。まもし俺があそこに来なかつたら、たぶん君は生きていなかつただろうな」

「……やうですか……」

「……特に問題はなさそうだな

ロイはティファの状態から問題はなさそうと感じた。

「……といひで……。どうして……私を……？」

「……君は力が欲しいって言つたはずだが？」

「……あ……」

ティファは思い出した様子……

「あれ……夢じゃ……なかつたんだ……」

「……それで、君はどうあるんだ？」

「……そ、それは……」

ティファは少し考えた。

「……その力って……なんですか？」

「……HS『インフィニット・ストラトス』って、知っているか？」

「……HS……？」

インフィニット・ストラトス……通称『HS』

篠ノ之博士が開発したパワードスーツで、同時に最強の兵器として認識がされている。

どういうわけかは不明だが、HSは女性にしか反応せず、今の世の

中女性優遇社会になつてゐる・・・。

「HJつて、いづのは女性にしか反応しないからな・・・。つていつても、例外もあるけどな」

と、ロイの首に掛けられている一枚のメダルがチャリン、と鳴り響く。

「はあ・・・・」

「とつあえず、君はビリあるんだ?」

「・・・その・・・HJを見せて・・・もりえますか・・?」

「・・・せつだな・・・。臣闇は一見に如かず・・・だな」

「・・・・・はい」

「・・・・とつあえず、立てるか?」

「ええ・・・まあ」

と、ティファはベッドから下りて立ち上がる。

髪の色は銀色で、首のうなじまで伸ばしていた。瞳の色はルビーのように赤く、若干威圧感を放っていた。立ち上ると背丈はロイの胸のちよつと下ぐらいいの高さで、服装はグレーのタンクトップを着て、ポケットがたくさん付いているブラウンのズボンを穿いていた。

「じゃあつこえてくれ

「……せー」

そして一人は部屋を出た……。

「……あの……」

「ん?」

しづらしくしてティファがロイに話してきた。

「……あなたはここ住んでいるのですか?」

「……そうだな……今はここで隠れ住んでいるな

「隠れ住む……?」

「俺はとある組織に追われる身だからな……だからあんまり長く住んでいるわけじゃない……。転々と移り住んでいるのがほとんどなんだ」

「……やうなんですか」

「……それよつ、呼ぶのなら『博士』って呼んでくれ

「……はあ……」

そうして話しかけると、ようやくエリカがある部屋の前に着いた。

「着いたぞ」

そしてロイは扉の横のキーボードにパスワードを素早く打ち込み、そしてその隣にある静脈認証をして、扉のロックが解除された。

「この中に、エリカがある

そしてロイは扉を開いて、中に入つて行き、ティファもその後をついていく。

部屋の中は機材がいっぱいあり、作りかけのパーツとかがたくさんあった。

ティファはその中を興味津々に見回していた。

「これが、そのエリカだ

と、ロイは壁にあるライトのスイッチレバーを下ろすと、ライトがついた。

「これが・・・」

ティファの目の前には、一体のエリカがあった。

全体のカラーリングとしては、白がメインで、その次に多いのは黒で、各所に金があると、若干豪華な感じがする。形状から女性をイ

メージしたもので、腰にはスカートのように装備されているアーマーがあり、その先端にはのこぎりの歯のように並んでいる。両腕の下部には少し長いブレードが装備され、頭の上やボディー各所に刃物が装備されていた。

「コードネームは『フェイクライド』……俺が開発した第一世代型の試作ISだ」

「フニイクライド」

「――」いつは第一世代だが、性能は次世代のHSに匹敵するぐらいある

• • • •

ティファは興味津々でフェイクライドを眺めた。

「どうだ？」

「・・・是非・・・やらせて下さい！」

「・・・決まりだな・・・じゃあ早速そこに置いてあるIOSスースに着替えてくれ」

「ISスーツ・・?」

ティファはロイが指したほうを向いて机の上を見た。

机の上には衣類がたたまれて置かれてあつた。

「HISを装着時はそれを着るのが好ましい使用例だ」

「なるほど・・・」

と、ティファはHISースツを手に取ると、一旦置くと服を脱ぎ始めた。

「…？」

ロイはとつた後に後ろを向いた。

「・・・・・・」

・・・『気まずい』・・・・

「あの・・・着替え終わりました」

しばらくして、ティファは着替え終わった。

HISースツはフロイクリайдで口をわせて白をメインとした黒のツーツンカラーであった。

「や、そつか・・。じゃあ HIS の近くまで行ってくれ

ロイは照れながらも、フロイクリайдの制御コンピューターを起動させた。

ティファがフロイクリайдの近くまで来ると、HISは各アーマーを

展開してしゃがみ、操縦者の受け入れ態勢を取った。

「・・・これが・・・HS・・・」

「最初は足から入れてくれ。その次に腕を入れてくれ」

「分かりました」

そうしてティファはフェイクライドの脚部アーマーに足を入れて、その次に両腕アーマーに腕を入れて、背中を預けた。

「じゃあ、まずは第一フィットティングを行つ」

そして素早く手を動かしてキーボードを吊き、フィットティング作業に入った。

すると、フェイクライドのアーマーが閉じて、ティファの身体に装着していく。

そしてコードがフェイクライドの装甲に繋がり、システムを立ち上げていく。

「フィットティング終了まで少し時間が掛かるからな」

「・・・はい」

「・・・それと、平行してHSの適正も見ておくが

と、ロイはティファのHS適正を調べるためにシステムを起動させた。

「……君つて……あの『施設』の者か？」

「え……？」

少ししてロイがティファに訊いてきた。

「どうなんだ？」

「……ええと……その……はい……そうですね」

「そうか……」

「どうして……それを……？」

「……あの荒野に畠みたいな女の子が独りでいるわけがないからさ」

「…………」

「でも、何があったのか？」

「……や、それは……」

ティファはしばらく考えて……

「……あの施設から……追放されたんですね……」

「…………なぜ、そんなこと……」「

「…………私は…………遺伝子強化試験体として、生まれたんです」

「…………遺伝子強化試験体…………」「

「私には…………双子の姉がいました…………とてもそつくりな姉妹として…………いました…………」

「…………姉さんがいたのか…………」「

「はい…………名前は…………『ラ・ウラ・ボーデヴィッヒ…………いつも優秀な成績を残していました…………でも、私は違った…………』」

「…………」「

「同じようにして作られた双子なのに、私はいつも駄目なばかりで、成績も凄く悪かつたです…………だから…………私は『欠陥品』と呼ばされました…………』」

「…………欠陥品…………」「

「…………それからも、成績は向上せず…………最終的に施設から追放されたんですね…………」

「…………そうか…………そんなことがあったんだな…………」

「…………でも、そんな私でもある目標に向かうのならって思うと、勇気が沸いてくるんです」

「田標？」

「はい・。その施設では、最強の称号『レジェンド』っていうのがあるんです・。その称号を持つた人がいまして、その人は施設のみんなからは憧れの存在でした」

「・・・そうか・。憧れの存在がいるのか・・」

「・・・はい・。でも、私みたいな落ちこぼれには・・・どうていなれっこないですよね・・」

「・・・そとかな・・」

「え・・?」

「最初っからなれないって決め付けても、それが結果論じゃないさ・。やつてみないと分からぬことだつてあるものさ」

「・・・でも・・私は・・・全然駄目な・・・人間です」

「・・・いや・・・君はその隠れた才能を發揮できなかつただけかもしれないな」

「え・・?」

ティファアが疑問に思つてゐる間に、ロイはティファアのIIS適正に驚く。

(・・・・適正が『S』とは・・・。すごいな・・・)

「S適正で今のところ一番高いのは『S』だといわれ、現在では一人ほどしかいないといわれている。

そうやつていると、フィットティング作業が終わった。

「終わったか・・・」

ロイは素早く手を動かしてキーボードを叩き、フュイクライドに繋いでいるコードを外した。

「じゃあ早速、手を動かしてみてくれ」

「は、はー」

ティファは腕を上げると、手を動かす感じでやつてみた。

すると、右手が閉じて、今度は左手が閉じてと、それを交互に繰り返した。

「うむ・・・。じゃあ次に歩いてみてくれ」

「はー」

そして、ティファは歩こうとするが、中々動かない。

「Eつていうのは体で動かすと言つよりは・・・イメージして動かすものだな・・・。歩くイメージを浮かべてみる」

「は、はー」

ティファは歩くイメージを浮かべると、フロイクライドの右足が前に出で、それから少しづつ歩き始めた。

「ほお・・・。つまりじゃないか・・・。初めてこじては上出来だ」

「わ、そりですか・・・？」

「ああ。じゃあ次にPICOを起動させてみる」

「ぴ、PICO・・・？」

「・・・簡単に言えば半重力装置だな・・・。とつあえず思い浮かべてみてくれ」

「・・・は、はい」

そして、ティファが思い浮かべると、フロイクライドが浮かびだして、宙に浮いた。

そのまま辺りを浮かんだ移動して見せた。

（凄いな・・・。やすがに適正が『S』だとEとのシンク口率も高い・・・。それに初めてPICOを使用してもその力加減ができるとはな・・・。普通ならそのまま天井にぶつかるんだがな・・・）

ちなみにこれは経験談だところ・・・

そしてティファはEISの動きを短時間でマスターしたようだ、基本

動作をやつこなしていた。

「・・・今日は「ねぐら」でいいだろ？・・・」

「は、はい・・・」

そしてティファはロイの元に行く。

「とにかく・・・どうすれば外れますか・・・これ・・・？」

「いや、もうそれは君のものだ」

「え・・・? わ、私の・・?」

「ああ。そいつは専用機だ・・。君だけのHSだ」

「・・私だけの・・・HS・・・」

「HSを収納する感じでイメージしてみる」

「は、はい・・・」

そしてティファはそうイメージすると、フェイクライドは光を放ち、  
アーマーを収納した。

HSが消えたことでも宙に浮いていたティファはそのまま落ちむか、  
着地した。

そしてフェイクライドの待機状態は腕輪となつてティファの左の二  
の腕に付いた。

「専用機となつたエスはそうして待機状態になる。お前が呼び出せばいつでも出現するよ」になつてゐるからな」

「……わ、わかりました……」

「それにしても……初めてにしては凄いじゃないか……ふつうなら基本動作だけでもすべて習得するのに三日ぐらにはかかるものだがな」

「そ、そりですか……？」

「ああ。君の才能はここにあつたかもしれないな」

「…………」

「……これからも、よろしくな……」

「はい・・博士」

そして二人は一旦研究室を出た……

## story 出会い（後書き）

フュイクライドをビームで登場させようか迷っていたのですが・・・。  
外伝で登場させるよつじました・・・。

## Story2 別れ

それから数ヶ月過ぎた・・・

「はあああっ！」

広い室内でティファはフェイクライドを操って模擬戦を行っていた。

両腕のブレードを展開して、田の前で動き回る仮想標的を切り裂いた。

すると後方に武器を持つ仮想標的が現れ、攻撃してきた。

「くっ！」

ティファは床を蹴ってジャンプし、そのまま宙返りして仮想標的を飛び越えてその後ろに着地した。

「もうったー！」

そして右のブレードを仮想標的の背中に突き刺して、撃破した。

その直後に背中のキャノンを前に展開して、残った標的を撃ち抜い

た。

『よし・・・今日はこれでいいだね!。戻ってきてくれ』

その様子をロイは上にあるモニタールームで見ていた。

「はい・・・博士」

ティファはエスを解除すると、ロイの元に向かう・・・

「それにしても・・・もつエスのすべての動きをマスターしたな」

「そ、そりでしょつか・・・?」

ロイとティファはエスの研究室でエスの調整をしていた。

「使い始めてすぐに武装の展開や使用をマスターし、それから一週間で模擬戦闘まで来るからな・・・。凄い発達だよ

「・・・そりですか・・・」

「せうだよ・・・。」んなに凄いのに追放するとは・・・もつたいないな・・・

「・・・そりですね」

「それに、HSの稼働率も数週間でかなり高くなっているな・・・。  
そもそもここ最近で50%まで上がっているな・・・。」

「そんなに凄いのですか?」

「そりやそりだよ。普通ここまで上がるのに何は相当な訓練を重ねないとならないんだよ・・・。最低でも一年以上はかかるはず」

「そり・・なんですか・・」

ティファは凄いことだがんまり驚いた様子はなかった。

(やはり適正が高いとなると、発達の仕方も早い・・・いや、この子の場合異常だな)

そもそもHS適正と言つのは絶対値ではない。HSの動きは適正が高いといいのはそうだが、適正が低くても訓練を重ねることで適正S並みの動きになることもある。

しかし、ティファの場合、発達の仕方が尋常じやないくらい早い・・・。

(・・・俺でもまだそこまで稼働率は上がっていない・・・。この子はこいつのほうに向いていたんだな・・・。偶然つい言つのはま・・・本当に予期しない」とばかりだな・・・)

ロイは今後のティファの成長に期待するのであった・・・。

ビツイイイイイイ・・・・！

「！？」

すると、研究室の警報が鳴り響いた。

「な、何事ですか！？」

「待つてろ！」

ロイヤはとっとモニターを切り替える。

外のカメラに映っていたのは・・・

「くそっ！・・・もうあいつらが嗅ぎつけたのか！」

モニターにはここに接近中の歩兵隊が映っていた。

「それって、博士を追っている組織ですか？」

「ああ・・・しかし・・・今回早い

「

ドオオオン・・・！

「！？」

すると、研究室に爆発音が響き、振動が伝わる。

「な、なんだー!?」

ロイはとっさに原因を調べる。

「な、なに・・・もつ侵入されていた!?」

モニターには別の歩兵隊が侵入し、データバンクがある部屋に入っていた。

「ぐつ・・・データを盗む氣か!」

ロイはとっさにキーボードを一定のパターンで叩くと「データの消去を開始します」と表示された。

「一体何を・・?」

ティファはロイの元に寄る。

「データを消去する」

「そ、それじゃ・・・博士の・・」

「心配はない。バックアップはある」

と、キーボードを叩いて特定のパスワードを入力すると、横にあったディスクレコーダーからデータディスクが出てきた。

「よし!」

ロイはそれを全て抜き取り、ケースに入れた。

「…………めずい…………じうある…………」

ロイは時間がない中苦渋の決断をする……  
そしてキーボードでパスワードを入力すると、前に赤いボタンが出てきた。

「もったいないが……やつらデータを盗まれるよりはましだー！」

そしてロイはそのボタンを叩き押した。

すると、モニターに赤くカウントダウンの表示が出てきた。

「博士…………一体何を！？」

「自爆装置を作動させた…………。急いで逃げるぞ！」

と、ロイはティファの手を取ると、研究室の隅に走る。

「しかし…………もう逃げ場は…………」

「いや、まだある」

「え…………？」

すると、ロイはそのまま床を強く殴った。

その瞬間床のタイル一列が跳ね上がり、下に続く穴が出てきた。

「！」これは……？

「掴まつていろー。」

「え・・？・・うわっ！…？」

ロイはティファを抱きかかると、その穴に入つてこつた。

そしてそのまま落ちてこへと、そのまま床の穴に落した。

「こでっ！…？」

ロイはそのままトロッコの中に敷いてあつたクッションに着地した  
が・・・・

「うう・・・・・もう少しふかふかのやつにしてこればよかつた・・・

「

痛みのあまりロイの顔は歪む。

「は、博士・・・・

「じつかり掴まつていろー。」

そしてロイはトロッコのバーを前に押し倒して、トロッコはそのまま進んでいった。

しばらく進んだこと、後ろから地震のような揺れが襲ってきた。

「へーー。」

それによつてトロッコが揺れるが、脱線まではしなかつた。

「・・・爆発したか・・・」

先ほどの自爆装置が作動して爆発したのだ。

「・・・・・・・」

「行くぞ」

そうして、トロッコは止まつてロイは降つると、ティファもその後に続いた。

そして隠し通路を通りて、地表に出た。

そこは研究所からかなり離れた丘の上だつた。

「あーあ・・・・・。せつかく見つけた空き研究所だったのになあ・・・

」

ロイは遠くで炎を上げる研究所を見た。

「苦労・・・したんですね・・・探すのに・・・

「・・・まあな・・・」

そしてロイはポケットから端末を取り出した。

「・・・・・まずいな・・・・」

端末を開きその内容を見てロイの表情は曇る。

「どうしたのですか?」

「・・・ようつによつて・・・量産型のHISコアの設計図を奪われたみたいだな・・・」

「量産型の・・コア?」

「ああ。HISのコアは束にしか作れない・・・まあそれは普通の科学者のことだが、俺は違う・・・まあ最初のコアを作るのに結構時間是有したからな・・・。そのコアを元にしていくつかの機能をオーバーライドしてコストダウンした量産型のコアを完成させた」

「・・・・はあ・・・」

「それは設計図さえあれば誰にでも作れるものだ・・・。できれば

やつらに奪われたくなかったが……奪われてしまつたな……

そしてローリーは端末をポケットに床すと、床の上の岩壁の近くまで行き、岩壁を叩き始めた。

「……何をしていろのですか?」

「……静かに……」

と言われ、ティファはしぶしぶ黙つていろと……

「……ううだな」

数回叩いていると、わざわざまでの音を呂じてこる音となみで違つ音がした。

「よこしょつと」

そして、ローリーの岩肌を持つと、そのまま外した。

「……へ?」

ティファは一瞬目を疑つた。

そしてそのまま岩肌を模した壁を放り投げると、その壁で隠された空間に入る。

その中に、ジープ一台が入っていた。

「それは……?」

「万が一のための逃走用の車さ……」

と、ロイは車の表面についている砂埃を払うと、車に乗り込み、ティファもその後で乗り込んだ……

「これから……どうするのですか……博士……？」

ティファはしばらぐして聞いてきた。

田の前には荒野が一面に広がっており、特に何もない。

「…………隠れ家に向かつ……」

「隠れ家……？」

「ああ……」

「ヤード何を……」

「…………君を置いていく

「え……？」

ティファは一瞬理解できなかつたが……

「ど、どうですか！？」「

「・・・これ以上・・・俺の事情に君を巻き込むわけには行かない・

「・

「・・・そ、そんな・・・」

「・・・俺だつて・・・別れるのはつらこや・・・だが、俺の事情に巻き込まれて命を落とすほうが・・・みつけまい・・・」

「・・・・・・」

それからじばらじばら沈黙が続いた・・・

じばらじばらして、車は一軒の家に着いた。

ローリーとティファは車から降りて、家の中に入った。

「・・・・・」

中は結構がらーんとしており、結構ぼうだつた・・・

「・・・私・・・」で・・暮らすのですか・・?」

「・・まあ、一見しただけじゃその反応だらうな

「・・・?」

「まあ、これを見れば一安心さ」と、ロイは室内の左側の壁を叩くと、そこが開き、スイッチが出てきた。

そしてそれを押すと、隣の壁が開き、下に続く階段が出てきた。

「・・・これは・・・」

「ついて来い」

そしてロイは階段を下りてこぎ、ティファもその後に続いた。

少し歩いて、真っ暗なところへいった。

「一体・・・ここなにが・・・?」

「・・・」

と、ロイは壁のレバーを下ろすと、ライトが一斉に光った。

「うわー」

ティファは一瞬で田を覆つた。

「・・・」

そして腕を退けると、セイには様々な機器があった。

「地下にはHISに関する機器を揃えているし、自家発電を行つてゐるから電気も使用できる。ここは数十年分の食料を貯蔵しているから、食べるのに困らないだつ」

「……す、凄い……」

「それに衛星電波を受信できるから上にあるテレビが見れる……。俺がいなくても毎日ニュースを見てこうよ」

「は、はい」

「それと、HISの訓練と身体を鍛えるのも毎日行ってくれ

「……」

「それと、HISの機器はマニアアルを見れば、君ならすぐ理解できるから、HISの調整を怠らないように」

「……はい」

「衣類も一応取り揃えてあるから……基本何も困らないはずだ」

「……」

「……じゃあ……俺は行くぞ」

と、ロイは階段を上つてこゝ、ティファは少しして上つてこゝへ。

「…………本当に…………行つてしまつのですか…………？」

「…………すまないな…………できれば君も連れて行きたかったんだが…………これ以上危険に巻き込むわけにはいかないからな」

ロイは車の前でティファに別れを言う。

「…………まだ…………博士に学びたいことが…………あつたのに…………」

「…………そつか…………十分に教えることができなくて…………すまないな…………ティファ」

「…………博士…………」

すると、ティファの目じりに涙が浮かぶ。

「…………泣くなよ…………俺だつて寂しいさ…………」

ロイはティファを優しく抱くと髪を優しく撫でる。

「…………博士…………また…………会えますか…………？」

「…………そうだな…………いつかまた…………会おうな…………」

そしてロイはティファを離すと車に乗り込み、車を走らせた。

「 . . . . . 」

ティファはその車を見えなくなるまで見届けた。

「 . . . あ、ありがとうございます。博士 . . . 」

ティファは膝を着き、涙をこぼした . . .

そして . . . 時は過ぎていった . . .

## Story2 別れ（後書き）

・・・次回で新しい展開になります。

そして・・・四年の歳月が経つた・・・

『 それでは、次のニュースです。世界最強で知られるあの  
ISを男性で初めて動かしたことがきました・・・女性にしか  
反応しないISとあって、この事態はとても重大なことだといいま  
す・・・』

そのテレビに流れるそのニュースを・・・一人の女性が見ていた。

「・・・ふーん・・・博士が言っていた例外って・・・じついうこ  
となのね・・・」

その女性・・・ティファはコーヒーを一口飲む。

あれから四年の歳月が経ち、ティファはたくましく成長していた・・・

四年前とは異なり、身長も伸び、身体はしつかりとしており、スタ

イルもよくなり、胸も結構大きくなっている。。。銀色の髪はあれから切つていないので腰の位置まで伸びていた。

服装はグレーのタンクトップに、ブラウンのズボンを穿いていた。

「・・・結構・・・面白いことになりそうね・・・」

そう言つて、ティファは席を立つと一部の壁を外してその下のスイッチを押して、となりの扉を開けた。

そしてそのまま中に入つていった・・・

ティファはE.Sスーツの着替えると、訓練場に入る。

「・・・FHイクライド・・・・展開」

ティファはE.Sを開いて、E.Sアーマーを纏つ。

「・・・さてと・・・」

ティファはP.H.Cで浮いた状態で進み、壁にある武器庫に向かう。

「博士が残してくれた武器・・・これで最後ね」

ティファはずりと並んだ武器の中から、一つの武器を手に取つた。

一見すればランスのように見えるが、刀身部はFHイクライドのブレードに酷似しており、その根元にはリボルバー式の弾倉があった。

「・・・仮想標的をIISに設定・・・と

ティファは相手の設定をすると、目の前に無人IISが現れた。

形状からして『鉄<sup>クロガネ</sup>』と呼ばれる第一世代型の量産型IISであった。操縦者がいる場所には機械が施されていた。

「ああ・・・いくわよー。」

そしてティファはランスを握り直すと、一気に無人IISに向かって行つた。

鉄は左のサイドアーマーから日本刀型のブレードを抜き放つと、ティファに向かっていく。

そうして両者のブレードが交じり合つた。

「うおおおおつー！」

ティファはそのまま鉄を押していく、強引に押し返した。

鉄はすぐに体勢を立て直して再度ティファに向かっていく。

そしてブレードを振るうが、ティファはランスのブレードで受け止めた。

その後に左腕のブレードを展開して鉄に切りつけた。

「でえいっ！」

そしてティファアは鉄に蹴りを入れた。

その直後にランスの先端を鉄に向けると、柄に付いているトリガーを引く。

すると、ブレード根元の一いつの六からエネルギー弾が発射された。

そしてエネルギー弾は鉄に直撃した。

ティファアはそのままランスを捨てると、両腕のブレードを展開した。

鉄は体勢を立て直そうとするが、もう遅かった。

「終わりだ・・・」

そして左腕のブレードで鉄の右腕を切り落とすと、そのまま右腕のブレードで鉄の胴体に突き刺した。

それから足で鉄を蹴り飛ばすと、背中のキャノンを展開して鉄に向け放つた。

そしてエネルギー弾は鉄を撃ち抜いて、消滅した・・・

「・・・」じんなものか・・・。手こたえがないな・・・

ティファアはランスを拾い上げた。

「・・・もつ少しレベルと相手を増やす、か

そつしてティファは訓練を続けた・・・

そんな時・・・

「うう・・・暑いな・・・」

荒野を暑そうに歩く一人の少年がいた。

アジア系の顔であり、十代中半くらいで髪は茶色で若干ツンツンとしている。右手首にはグレーの腕輪があつた。

背中には結構大きなリュックをからい、地図を見ながら歩いていた。

「・・・うーん・・・」の辺りだと思つんだがな・・・やっぱ俺の方向音痴のせいか?」

少年はため息をついて、そのまま歩いていった・・・

「終わりだ！」

ティファはランスを振るつと鉄を切り裂いた。

そして鉄はそのまま消滅した。

「はあ・・・さすがに大勢じゃ・・結構来るわね・・・」

ティファは息を整えて、身体を真っ直ぐにした。

先ほどまで多数の鉄<sup>クロガネ</sup>と模擬戦を行い、全て撃破した。

「ふう・・・」

ティファは一息つくとHISを解除した。

「・・しかし・・・結構汗を搔いたな・・・」

ティファの身体は汗でいっぱいだった。

「・・・でも、博士もせめてクーラーぐらい付けてもよかつたのに・・・」

訓練場はクーラーなどの機器がないので、基本的にこは暑いのだ。

「・・・シャワーでもいいけど・・・たまにはあそこでもいいかな・・・」

と、ティファは訓練場を後にした・・・

そして所変わつて・・・小屋より少し離れた湖・・・

「・・・やつぱり・・・」ほいいわね・・・

と、ティファは汗流しを兼ねて水浴びをしていた。

水に濡れた銀色の髪が太陽に光に反射して輝いていた。

「シャワーより・・・」ひつして水浴びをするのも悪くないわね・・・

」

ティファは両手で水をくつて身体に浴びさせた。

やうじてこると・・・

「・・・!」

前の岩から物音がして、ティファはそれに気付くと、とっさに立ち上がると服の上に置いていた拳銃を手にしてそのままに向け数発発砲した。

「どうあああつー?」

岩の向こうから悲鳴が聞こえた……

「誰だー!隠れてないで出てこー!」

すると、岩の向こうから手が出てきた。

「わ、分かった!・・・だ、だから・・・撃たないでくれ・・・!」

そして、オドオドして一人の少年が出てきた。

「そこで何をしているー!」

ティファは拳銃を少年に向けた。

「ま、待ってくれよ!・・・お、俺はただ道に迷つただけなんだ・・・。け、決して覗きをしていたんじゃないぞ・・・!」

「・・・・・・・」

ティファは更に少年に銃を向け、トリガーに指を当てる。

「・・・た、頼む・・・し、信じてくれよ・・・!」

少年は結構震えていた・・・・・

「…………」

ティファはしばらく睨み付けた……。

「…………」

「…………」

そしてティファは拳銃を下ろすと、それを地面に置くと置いていたタオルで身体を拭いて、服を着た。

「…………た、助かった…………」

少年は安堵の息を漏らして地面に座り込む。

すると、ティファが近付いてきた。

「…………本当に…………道に迷つただけなのか…………？」

「あ、ああ…………。そうだよ…………」

少年はとつせに立ち上ると無実をアピールした。

「…………や…………」

そしてティファはしばらく考えて……。

「・・・なら、ついに来る・・?」

「え・・?い、いいのか?」

「・・・あなたに銃を発砲したお詫びよ・・」

「・・・じゃ、じゃあ・・・行くよ・・」

「・・ついできて・・」

ティファは小屋に歩いていき、少年もその後に続いた・・

「ア」のイスに座つて待つて

「あ、ああ・・」

少年はイスに座ると、ティファはコップにお茶を入れた。

「・・・・・」

少年は小屋の中を見回した・・

「・・・は」

と、ティファがお茶を差し出した。

「あ・・・ありがと・・・」

少年はお茶を受け取つて、一口飲んだ。

「・・・な、なあ・・・え、ええと・・・」

「・・・ティファ・・・」

「え・・・?」

「ティファ・ボーテヴィッシュ・・・。私の名前よ」

「や、そつか・・」

「あなたは・・?」

「お、俺・・?」

「名前・・あるでしょ?」

「あ、ああ・・。名前は・・『レオン・エスグランデ』」

「・・・レオン・・」

「・・・改めて聞くけど・・・君はここに住んでこるのか?」

「・・・やうね・・」

「なんでだ? こんな荒野のど真ん中で・・・」

「・・・私は・・・ある人を待つていてる・・・ずっと」

「待つていてる・・・?」

「・・・私の・・・命の恩人・・・」

「・・・そつか・・・」

「・・・それで・・・あなたはビビりしてあんなところにいたの」

「・・・俺つて・・・昔から結構な方向音痴なんだよ・・・。だから簡単に目的地に着けないんだよな・・・。だからあの時も迷っていたんだよな」

「・・・方向音痴ねえ・・・」

「・・・話戻すけど、俺は旅していたんだよ」

「・・・旅?」

「ああ。とある理由で旅をしているんだが・・・まあ今時旅つてしまっているけど・・・まあ今の俺はそんな身なのさ」

「ふーん」

「・・・でも・・・君はいつまでもここでその人を待つているつもりなのか?」

「……そのつもりよ」

「……その人って……本当に床の上に言ひ保障はあるのか？」

「……博士は……嘘をつかない」

「……わうか……」

レオンは席を立つた。

「……お茶をくれてありがとな」

「……別にいいのよ……どちらかといえば……話し相手が欲しかった」

「……そつなんだ……やつぱり話し相手はいないんだな」

「……じとんとこそこそ……人はあまり来ないからね……」

「そりゃわうだな……」

そうしてレオンはドアを開けて外に出るのとした。

「……まあ、君がどいつ思つか分からぬいけど……一つ言つておくよ」

「……なに?」

「……もしその人とまた会いたいって言うのなら……自分から会いに行つたほうが会える確率が上がるんじゃないかな?」

「自分から・・・」

「・・・まあ・・・どうするかは・・・君次第・・かな・・」

「・・・考えておくわ・・」

「そりか・・」

そうして、レオンは小屋から出た・・・

「あつ、それと・・」

しかし、レオンはすぐに戻ってきた。

「まだあるの・・・?」

「・・・変なことを聞くかもしれないけど・・・また・・会えるかな・・?」

「・・・まあ・・・まあ会えたら・・・いいわね・・」

「・・・・会えたら・・・いいな」

そうして、レオンは外に出て行つた・・・

「・・・・・

しばらくしてティファはイスに座った。

「・・・自分から・・会いに行く、か・・」

ティファは顎に手を置いて考える・・・

「・・・悪く・・ないわね・・・。どちらかと言えば・・・私は行動するほうだから」

そうして、ティファはある決意をするのであった・・・・・

## Story3 新しい出会い（後書き）

今回の話から原作の最初あたりと同じ時間帯になります。  
ちなみに、外伝では正伝での話の裏側とかがあつたりします。

## Story 4 新たな旅立ち

それから一日経つた・・・

「これで準備はいいわね・・・」

ティファは地下室でとある準備をしていた。

「フュイクライドの『空き容量  
バストロット』は結構あるから、博士が残していく  
れた武器全部をインストールできるからね・・・。どんな状況でも困  
らないようにしないとね」

そうして武器を全て入れ終えると・・・

「あとと・・・。これでよし、と」

そしてティファは別のところに行き、別の準備をした・・・

しばらくして、ティファは上で最終確認をしていた。

(食料と水はこれでしづらくなは持つ、と。HISースと着替えも入  
れて、一応現地のお金もよし・・。これで準備はよし)

ティファは結構大きなリュックのふたを閉じると、背中にからい、  
壁に掛けていたゴーグルを首に掛けた。そして指先が開いた手袋を  
する。

そして、ティファは扉の鍵を閉めて、窓の扉も全て閉めた。

「さて、と」

全て閉め終えたティファは荒野に向く。

「・・・自分から会いに行けば会える可能性は上がる・・・か」

ティファふんと鼻で息をすると、荒野を歩き出した・・・

それからじょじょ歩いていくと・・・

「・・・道路」

ティファは一本の道路に出た。

(・・・これを辿つていけば・・・多分町に着く・・・はず)

せつしてティファは道路に沿つて歩き出した……

しばらく歩いてると、ようやく一軒のトラックが走ってきた。

ティファは手を振つてトラックを止めた。

「君のトラックってどこまで行くの?」

「君の先ずっと前にある町までだ」

と、トラックの運転手が窓から顔を出していった。

「……ならその町まで乗せてもらえない?」

「別にいいが……次の朝までは着かないぞ?」

「構わないわ」

「……なら、荷台に乗れ」

「あらがどつ

そしてティファはトラックの荷台の壁に手を置いて軽やかにジャンプして乗り込んだ。

そしてティファはトラックの荷台の壁に手を置いて軽やかにジャンルを着けてトラックは走り出して、ティファは首に掛けているゴーグ

そうして・・・次の朝・・・

「・・・朝、か・・・」

ティファは、「一グルを外すと、朝日を見上げた。

「着いたぜ、お嬢ちゃん」

「・・・・・」

ティファは起き上がると、荷台を降りた。

「ありがとう」

ティファはお礼を言つて、町に入つて行く・・・

町・・・と言つても結構な田舎町で、建物にはボロボロな箇所が多かつた。

(・・・)で情報収集つて言つても、こんな町じゃ博士を知つてい

る人なんていない、か)

とりあえず何か情報を掴むためにティファは街中を歩いていった・

・

「・・・・・」

しばらくしてティファは建物の壁に持たれかかり、地図を広げて見ていた。

(・・・ここから次の町までは結構あるみたいね・・・。ここに一泊して、それから朝早くに出発して、途中で野宿して行けばここから一日半ちょっとで着く・・かな)

そう考へていると・・・

「おい、女

と、自分の事を呼ばれたのか、ティファは少し顔を上げて前を見た。

そこには数人の強面の男性がいた。

その中で中央にいるのは幹部なのか偉そうな感じであつた。

「見ない顔だな・・・。旅の者か」

「そうなるわね」

ティファは興味を無くして、再び地図に目を向ける。

「おー、この人を誰だと思つているんだあ？」

と、男Aが詰め寄つてきた。

「いくらよそ者だから知らないといつてもな、この町に入つたらまず知つておかないといけない人なんだよ・・・」

「・・・ふーん・・・」

「なめどんのかオラッ！』

「よせ」

と、幹部らしき男が男Aを止める。

「・・・まあ知らないのなら仕方がないな・・・。だが、覚えておけ・・・。この俺・・・テキサス様をな・・・」

「・・・覚えておくわ」

ティファは地図を置むと、リュックを持つてその場を離れようとした。

「まあ待てよ、俺の家に来い・・・部下が失礼したお詫びだ

「・・・悪いけど・・・興味ない」

そしてティファは歩を出さうとしたら……

「・・・待て・・・」

と、男Bがティファの肩に手を置いた。

「・・・・!?

その直後、ティファは男Bの手を掴むとそのまま背負い投げをした。

「て、てめえつ!」

そして男Cがティファに殴りかかってきた。

「・・・・・」

しかしティファはあわてた様子を見せず、軽く男Cの腕をかわして、そのまま男Cの足を払う。

「いでのー!?

男Cが倒れた瞬間ティファは男Cの足を払った足をそのまま男Cの背中に叩き落す。

「調子に乗るなあつ!」

と、男Aが拳銃を取り出した。

「・・・!」で止めないでもりえないかしさ!

ティファは素早く動き、男Aの拳銃を蹴り上げた。

「なつー?」

そしてそのままかかと落としを男Aの左肩に落とした。

すると「コキッ」と鈍い音がして、男Aの悲鳴が響いた。

「・・・まだやるかしりっ。」

と、ティファは手をポキポキと鳴らし、落ちてくる拳銃をキャッチする。

「うわ・・・。お、覚えておけ!」

と、テキサスと名乗る幹部は逃げていき、遅れて部下三人も逃げていた。

「やれやれ・・・。面倒ね・・・」

ティファは拳銃をズボンの間に差し込み、置いていたリュックをからりと、再び街中を歩き出した。

「あの・・・」

「・・・?」

abisとした瞬間、後ろから呼ばれた。

ティファは振り向くと、そこには一人の老人がいた。

「少しいいですかな・・・」

「・・あなたは?」

「わしがこの町にしてのう・・・」

「町長・・・?」

「つまり、この町はさつきの男たちで困つてこらつてことですか?」

ティファはパンとハムとマスターと、いつ簡素なサンドイッチを食べながら、町長の話を聞いていた。場所は街中のとある喫茶店のテラスだ。

「ええ・・・。あやつらはこの町に来ではよく女に絡んでは、連れ去り、更には食料まで奪つと詰つてしまつたものでしてねえ・・・」

「なるほど・・・。どうでこの町には女性が少ない上、食料も少ない・・・か」

「ええ・・・。あなたに差し出したそのサンドイッチも残つておつたものをかき集めて作つたものでしてねえ・・・」

「…………」

ティファは普通に食べていた自分に少し罪悪感を覚えた。。。

「あ、いこのですよ。お咎わまで出すのは少しでもいいのでなければ失礼ですし・・」

「…………やうですか。。。しかし、リリまでやるやつは、なぜ市民は反抗しないのですか?」

「。。。トキサスと言ひ駄は、リの土地の領主でしてね。もし反抗などすればリの土地から追出されるのです。。。」

「追い出されるへ。」

「ええ。。。ただでさえ住みこむここの地方です。。。リを追出されたら他に住むといふなどあります?」

「…………」

ティファはその『追出される』ところに葉に表情を彫り込む。

「自身も体験したトライウマだ。。。」

「。。。それで、本題は何ですか?」

「。。。じつらの勝手なのですが。。。リの町に留まつてもいいませんでしょうか?」

「詫問ねへ。」

「勝手ながら申し訳ござりません。。。しかしあなたの強さは先ほど見て分かりました。。。ですから、あの男の嫌がらせを退けるためにここにいてもらいたいのです。。。」

「・・・残念ですが。。。私にはやるべし!ことがありますので」

「・・・やつですか。。。それは残念です」

町長の表情は曇る。

「・・・ですが、私はここ一晩いますので。。。」

「せうですか。。。でしたら私の宿でお泊まり下さい。あの男を追い出してくれたお礼です」

「・・・いいのですか?」

「ええもちろんん。。。」

「・・・では、お願ひします」

「わかりました。。。それではここから歩いて最初の左側の角を曲がればすぐですので、お越しくださいませ」

「・・・はい」

そうしてティファはリュックをからい、店を出た。。。

「・・・・大変・・だね・・。やつぱり・・」

ティファは考へながら、街中を歩いていると・・・

「・・・ん?」

すると、とある建物の下で人だかりができていた。

「・・・なんだらう?」

ティファはその人だかりに近付いていった・・・

「・・・こいはこれで、と・・・。よしできた!」

と、一人の少年・・・・レオンは工具を両手に持つて立ち上がる。

目の前には小型のトラックがあり、エンジンを直していたようだ。

そして運転手がエンジンを掛けると、作動音と共にエンジンが始動した。

「おおすげえ!あのポンコツエンジンを直すなんて・・。すごいな

!」

「なあ!・・。このくらい朝飯前で・・」

と、レオンは指で鼻をこする。

「本当に助かっただぜ・・・。少ないナビ」れせむ礼だ」と、運転手は運転席から小袋を出して、中にお金を入れて、レオンに渡した。

「毎度あつー」

そしてトライックが行くのをレオンは手を振った。

「へへ・・・。これで少しほとぎの足してみなみるぜ」

と、レオンは小袋の口を開けて中のお金を数えた。

「・・・あなたつて・・・やつぱり特技があるのね」

「え・・・？」

レオンは小銭を揃んだまま振り向くと、呆れた様子のティファアの姿があつた。

「・・・で、ティファア・・・？」

レオンは驚いて理解するのに時間が掛かつてしまつた。

「・・・お、驚いたな・・・。『やか』んなにすぐ戻来できるなんて・・・」

「やつね・・・。しかし、なんであなたが『ここ』? 時間からしてこよじまだ先のところこんなはずよね・・・」

「は、ははは……。それが……途中で道に迷つても……着いたのが昨日の夜さ……」

「……まあ……。方向音痴は相当なものね」

「まあ、まあな……。……それより、どうして君はいこうって？」

「……あなたの言つたとおりにしてみただけよ」

「や、そつか……。なら、君が会いたいって言つ博士とあいつを呂るわ」

「……わづね」

レオンは小袋の口を開めると、ポケットの中に入れた。

「……なに？」

ティファはレオンから見つめられるのが気になつていた。

「あ、い、いや……なにもないよ」

「……わづ」

ティファはそれから歩き出した。

「君はここれから歩くんだ？」

「……こに一晩泊まるわ……。それからこから出る」

「・・・そ、うか・・・。また別れてしまつんだな・・・」

「・・・わ、うね」

「ひ、ひ・・・」

レオンはティファの素つ氣無い態度に調子が狂う。

ドオオオオオン・・・・・!

「一・?」

すると、右から爆発音がして、ティファとレオンは振り向く。  
「な、なんだ・・・! ? つておい! -」

ティファはひとつに爆発音がした方へと向かつ。

「ま、待ってくれよ! -」

レオンもその後に続く。

そして・・・

「おまえらッ…」の俺に逆らうことビリになるのか…思ひ知らせてやるべー！」

と、部下の一人が手榴弾を投げ、建物の中に入ると大きな音と共に爆発した。

それはセツキの男たちであった。

どつゅうせつしきの仕返しに多数の部下を引き連れ、武装化してきたようだ。

「おいー…セツキの女出て来い！出でこなければこの町を破壊するぞー！」

と、テキサスはメガホンで叫ぶ。

「…出でこない氣か…。なうば…」

と、テキサス部下より手榴弾を受け取ると、ピンを抜き、店に向けて投げ放つ。

しかし、手榴弾は別方向から来た銃弾で軌道が大きくずれ、町の空き地に落ちて爆発した。

「…？」

そして、建物の陰から拳銃を持ったティファが出てきた。

「出できたか・・・

そしてテキサスは金ぴかのハンドガンを取り出すとティファに向ける。

「・・・無抵抗な町にそんなに大量な武装してくるなんて・・・最低ね」

「ほう・・・。中々言ひづいやねえか・・・。だが、俺を怒らせたらどうなるのか・・・教えてやる・・・やれ・・・!」

そして、部下たちがライフルやマシンガンを構えてティファに向けた。

「・・・・・・」

しかしティファは顔色一つ変えなかつた。

そして一斉に射撃が始まった。

「ハツハツハツハツハツ!! 思い知つたかー! この俺に逆らえばどうなるかをなつ!」

テキサスは高らかに笑うと、手を挙げて銃撃をやめさせた。

「・・・・どうだ・・・もう死体は・・・」

と言いかけた瞬間・・・

「・・・・!?

すると、砂煙が晴れると、そこにはティファが無傷で立っていた。

「ば、馬鹿なー?」いつ不死身か!?

「・・不死身ね・・。そういうもんじやないわね・・

と、ティファの右腕には・・・

「な、なんだ・・あれ!?

砂煙が完全に晴れると、ティファの右腕には局部展開した『フェイクライド』があり、そこからエネルギー・シールドを展開して弾丸を全て弾いていた。

「ま、まさか・・・お前は・・・」

「そうね・・・。でて、どっちが馬鹿だと思つ」

そしてティファはフェイクライドを完全に展開して、PHCで宙に浮く。

「HJDだと!・・・まさか・・そんな・・!?

テキサスが驚いている間もティファはゆっくりと近づく。

「・・う、撃て!撃ちまくれ!」

と、叫ぶと部下たちは一斉に射撃を開始した。

しかし弾丸はエウのシールドエネルギーで弾かれて、ダメージはない。

「……エウ相手なら手加減なしでできるけど……今回は人間が相手だし……」

と、ティファは一気に飛び出した。

そして手加減して部下たちを腕でなぎ払う。

「はああああっ！」

そのまま回し蹴りをして部下たちを蹴散らしながら、左腕のブレードを開いて部下が持っているライフルやマシンガンを切り裂いていった。

「ぐ、ぐそー……まさかエウでくるとは……。」いつなつたり……

テキサスはいつのまにか逃げており、後ろで待機していたトレーラーに乗り込み、運転席に置いてあつたスイッチを押した。

「くくく……まだ使つ氣はなかつたが……試しにまよひうどいい・・」

そしてエンジンを始動させた。

「……？」

しかし、キーを回してもエンジンは一向に動かない。

「なぜだ・・・？なぜ動かん！？」

と、一心不乱にキーを回していると・・・

「わりいな。エンジンと直結しているコードは切らせてもらつたよ

と、二つの間にかレオンが来ており、ドアを開けてテキサスに殴りかかる。

「ぐほっーー？」

思いつきり殴られてテキサスはのびてしまつた・・・

「これで最後ー！」

そしてティファは最後に一人の腹を殴り、気絶させた。

「・・・ふう」

そして辺りを見回して、もう残つていないことを確認する。

「あつけないわね・・・」

そしてエリを解除しようとした瞬間・・・

「・・・・・」

すると正面から銃弾が飛んできて、ティファはひとたびに回避した。

「敵・・・」

そして前を見ると・・・

「・・あれは・・・?」

そこには三体のロボットがあり、同じ形であった。全体の色は茶色で、頭には赤く輝く一つ目があり、ずつしりとした形状であった。

中央の機体は右手にサブマシンガンを持ち、左腕にはシールドをつっていた。

左側、右側の機体は斧を持っており、中央と同じシールドをついた。

「・・・・」の反応・・・まさか・・HS・・・?

モニターには田の前の三機の反応はHSと断定していた。

「・・・あんなやつらがHSを持つているってこのも変な話だけど・・」

すると、中央のHSがサブマシンガンをティファに向け放ってきた。

「今は考へてない場合じゃない!」

ティファアは右手に『バーストマーテルガン』を展開して、ISに向け放つ。

しかしISは左腕のシールドで弾丸は弾いた。

「くつー！」

ティファアは移動しながらレールガンを放つ。

しかしISはシールドで防いでいた。

「何で硬さなの・・・でも動きはそれほど速くない」

ティファアはそのまま砲撃し続け、三機にスキャンを掛ける。

「・・・あの三機・・・無人機？」

スキャンの結果は、三機のISには人が乗っていない。

「・・・無人型のIS・・・でもあんなやつらにそれが造れるわけがない・・・」

しかし、ティファアはとあることに気がつく。

「・・・まさか・・・博士が言っていた組織に仕業・・・？」

田の前の機体はその組織が作り上げたIS・・・

「くつー！」

ティファはレールガンを収納して、両腕のブレードを展開して突撃する。

「はああああっ！」

そしてブレードを中央の無人ISに振るう。

しかしISはすぐに左腕のシールドを前に出してブレードを受け止める。

「くつ！ 硬い・・」

その後、右側から無人ISが接近して、斧を振り下ろした。

「・・・！」

ティファはとっさに相手のシールドを使って、後ろに下がり、回避した。

「このつー！」

その後に背中のキャノンを展開して、無人ISに向け放つ。

しかしキャノンから放たれたエネルギー弾は斧を持ったほうの無人ISのシールドで防がれた。

「くつ・・・あのシールドが厄介ね・・」

そして再度無人ISに接近する。

すると斧を持った無人ISが前に出て、斧を振り上げる。

「そこだつ！」

ティファはそのままキャノンを放ち、無人ISの斧を弾き飛ばした。

「はああああつ！」

そして左腕のブレードを振り上げて、無人ISの右腕を切断した。  
しかしその直後に後ろにいた無人ISの蹴りをくらい、後ろに飛ばされる。

「くつ！」

そして無人ISがマシンガンを向けた。

しかし、横から何かが投げられて、無人ISはそっちの方に気を取られた。

そして投げられたそれは大きな音と共に爆発した。

「・・手榴弾？」

そして、建物の陰からレオンが出てきた。

「ティファ！助太刀するぜ！」

「な、何を馬鹿な事を！・・あんたに何ができるって言うの・・・

「！」

しかし・・・

「心配はいらねえ・・・俺も同じ力を持つているからな」

「・・・え・・・？」

すると、レオンは右腕につけているグレーの腕輪を前に出す。

「来い！『ヴァイスハイト』！」

すると、その腕輪が光り出し、レオンは光に包まれた。

「これは・・・まさか！？」

そして、光が晴れると、そこにはヒトを身に纏つたレオンの姿があった。

全体のカラーリングはグレーがメインで、色は濃い部分と薄い部分とあり、形状は直線な面が多いもので、両肩のアーマーは左右非対称で、左肩にはシールドが搭載されていた。背中にはブースター・パックがあり、その両サイドにキャノン二つを搭載していた。頭のデバイスはヘルメットに近く、後頭部にあたる部分には一本のアンテナがあり、目の部分には透明度の高いオレンジのバイザーがあつた。

「よっしゃー行くぜー！」

そしてレオンは背中のキャノンを展開して、無人IISに向かってい

く。

「ツイン・ビームキャノン！」

そしてビームキャノンより放たれたエネルギー弾は右腕を失った無人ISのシールドに直撃して、そのまま打ち碎いた。

「…あのシールドを…一撃で…」

「ティファ！ボッとするなよ！」

「…！分かっている！」

そしてティファは一気に接近し、丸裸となつた無人ISの胴体にブレードを突き刺した。

そのまま横に切り裂いて、無人ISを撃破した。

「もう一丁！」

レオンはキャノンを再度放ち、斧を持つた無人ISのシールドを破壊する。

「いくぜっ！俺のとつておきを見せてやるぜー！」

と、レオンは両手を叩きつけると、右手にエネルギーを纏わせる。

「鉄拳制裁…」

そこから地面を蹴ると、一気に無人ISの懷に入り込む。

「ビーム・ナツコオツ！」

そして右の拳を無人ISの胴体に叩きつけた。

「はああああ・・・」

すると、右腕が更に輝きました。

「破つ！』

その瞬間右腕を通り、無人ISの胴体をエネルギーが貫通して、爆散した。

「素手で・・・なんてやつなの・・・」

「ティファー！後一体だぜ』

「・・・言われなくとも！』

ティファーは右手に『G・インパクトステーク』を展開して、最後の一體に向かって行く。

サブマシンガンを持った無人ISはティファーに向けサブマシンガンを放つ。

「おっヒ・・俺もいるぜ！』

と、レオンは右手に中型のスナイパーライフルを展開して、無人ISに向け構えた。

「狙い撃つぜ！」

狙いを定めたレオンはスナイパーライフルを放った。

そして弾丸は無人IISのサブマシンガンを撃ち抜いた。

「くらえっ！」

そしてティファはG・インパクトステーキを無人IISの胸部に叩きつけた。

「撃ち抜く！」

そしてステーキを一気に全て叩きつけて、無人IISは吹き飛ばされると、そのまま爆散した・・・

「よっしゃっ！」

レオンはガツツポーズを取る。

「・・・まさか・・・こんな近くに・・・いたものね・・・」

ティファはレオンをしばらく見た・・・

それから町のみんなからお礼の言葉を受けて、そのまま宿に泊まり、次の朝を迎えた・・・

「・・・やへと・・・」

ティファは出発の準備をして、宿を出た。

まだ朝早いので、少し薄暗かった。

それから歩いていると・・・

「ま、待つてくれ！ ティファ！」

「・・・・？」

ティファは後ろに振り向くと、後ろから走つてくるレオンの姿があつた。

「・・・・レオン」

「はあ・・・はあ・・・ようやく見つけたよ・・・

レオンは膝に手をついて、息を整えた。

「・・・今後は何の用？」

「お、俺・・・昨日の晩から考えていたんだが・・・決断したぜ」

と、レオンは息を整え終えて、まっすぐ立つ。

「ティファ……。俺も君に旅について行つていいか?」

「……私の……?」

「ああ……。俺を連れて行つても、損はないぜ」

「……悪いけど……私は一人のほうがいいの」

「いや、そんなにあつあつ相定しないでくれよ」

「否[逆]するわ。面倒なことは嫌いなの」

「頼むよ……。うのとおつだー。」

と、レオンは両手を合わせて頭を下げる。

「……どうしていままで黙つの?」

「……まあ、ロマンチスト[恋愛]わけじゃないが……もし俺たちの出会いが運命だったなら?」

「運命……?」

「ああ。あの荒野で俺とティファは偶然出会つて、そこから別れて、そして今ここで再会した。俺たちには何かの縁があるんだよ」

「……それも随分ロマンチストっぽく聞こえるけど……」

「・・・まあ・・・それは言えてる・・かも・・」

「偶然よ・・・」

「ぐ、偶然たつて、それにしてはあまりにもあれじゃないか?もし俺が方向音痴じゃなかつたら、俺は次の街にまで行って、君とはこうして再会できなかつた」

「自分が方向音痴だから、私との再会ができた、とても言いたいの?」

「いや、だから・・・この再会は何かあるんだよ。だから、頼む!」

「・・・・・・」

ティファはしばらく考える。

(・・・メカニックの腕はいいとして・・・男性でありながら工事が使える・・・少なくとも、使えなくはない、か・・・)

そしてティファはため息をつく。

「・・・せいぜい・・・私の足手まといには・・ならぬことね」

「え・・?それって・・・」

「好きにすれば・・・・・」

「ほ、本当か!?」

「壇つておへけだ、あんたが私の足手まといになるのなら、私はすぐこでもあなたを捨てるからね・・・」

「お、おうー足手まといなんかとことどもないぜ。俺は役立つやー・・・

「・・・やつ」

ティファは呆れた様子だった。

「よしつー俺達の旅の始まりだ!」

そして、レオンは意氣揚々と歩き出した。

「・・・ちなみに」と、次の田畠地帯だけついたから

と、ティファはレオンが歩き出した方とは別の道を指した。

「や、そつか。ははは・・・」

レオンはテレながらティファの元へと駆ける。

「・・・はあ・・・先が思いやられる・・・」

と、ティファは右手を額に当てため息をつくのであった・・・



## Story4 新たな旅立ち（後書き）

ちなみにこうと、レオンはスパロボOGの『リュウセイ・ダテ』み  
たいなキャラクターと思つてください。

## Story5 二人の間

「やっぱり乗り物があると、便利だよなあ！ティファ」

「そうね・・」

と、レオンは後ろにいるティファに話しかけた。

二人は四輪バイクに乗つて、荒野を駆けていた。

「・・・しかし・・。廃材も同然なこのバイクを直してこうやって動かしているなんて・・・あなたつて結構やるのね・・」

一人が乗っている四輪バイクは荒野に放置されていたもので、それをレオンが修理したものである。

「だろ？ 大いに役に立つだろ？」

「・・・どうやら・・私はあなたを見ぐびっていたのね・・・・・

「・・・本当に信用ないんだな・・・・

「・・・とにかくで・・・普通に運転して、町に入つて捕まるんじゃないの？」

「その心配はない・・・。なんだって俺は特別免許を持っているんだ・・・。」  
「うう系の

バイクなら運転してもいいんだ

「・・・ふーん・・・意外なものね・・レオン」

「・・・だから・・俺のことは『レオ』って呼んでくれよ

「私はそういう仲になつた覚えはない・・・」

「・・・ひでえ・・」

レオンはぼやきながらバイクを運転した。

そしてじょじょにへりへりして・・・

「おっ・・・見えたぜ・・次の町だ」

前には次の町が見えていた。

「やつぱり乗り物だと早く着くな・・・

と、アクセルを握ると・・・

ボフツ・・・!

「・・・・・あはははは・・・・・はあ・・・

マフラーから黒い煙が出て、まくはつと四輪バイクは止まっていつた・・・

「・・・せっぽつ・・・ジャンクパー・ツじや・・・持たなかつたか・・・

「

「・・・はあ・・・ド、どうある氣なの」

「・・・町で新しいパーソを賣わないと、これ以上の走行はできな  
いな・・・」

「・・・じゃあ・・・そこまで歩いていくしかないわね」

と、ティファはバイクから降りると、町に向かって歩いていく。

「はあ・・・手伝い無しですか・・・」

レオンはバイクのハンドルを持つて、バイクを押していった・・・

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・せつと着いた・・・

それからひりひり歩こんで、ようやく町に到着した。

「じゃあティファ。俺はパーソの買出しここへくるから、ティフ  
アはここで待ってくれよな

「・・・できるなら・・・早くしてよな」

「はいはい・・・分かりましたよ・・・」

レオンは町を走つていった・・・

「・・・」

ティファはバイクに座つて、地図を見ていた。

（仮にバイクが修理できなかつたら、今後の旅の修正が必要ね・・・。  
。そうなると）

と、考えていると・・・

「誰かっ！泥棒よ！」

すると、女性の叫び声がした。

声がした方を見れば、走つて逃げる男を追う女性がいた。

男の脇には女性のものと思われる鞄が抱えられていた。

「ハツハツハ！ちよろいもんだぜー！」

と、男がティファの目の前を横切りうつとした瞬間・・・

「・・・おわつ！？」

ティファアは座つたまま足を前にやると、男の足を引っ掛けた。

「・・・はた迷惑な」とは・・・やめてもらいたいわね・・・

そして足を上げて、そのまま男の首根っこに踵落としをした。

「げふつ！？」

そして男は氣を失つた・・・・

「いやあ・・・結構新品同然なのが格安だつたなんて・・・こりや  
儲けた！」

レオンは意氣揚々として、修理パーツが入った袋を片手に走つていた。

「・・・つて・・・あれ・・？」

レオンはバイクの前で人だかりができるといふところを見た。

「・・・なんだ・・？」

そして人だかりに近付いてみると・・・

「いやあ・・・ありがとうね・・・お嬢さん・・・泥棒逮捕に協力して・」

「・」

「当たり前のことをしただけです・・・」

そうして、警察官が気を失った泥棒を引きずつて、署に連行した・・・

人だかりが解けていき、レオンはティファに近付く。

「なあ・・・ティファ・・・。一体何があつたんだ・・?」

「・・・泥棒逮捕・・・見て分からぬかしら?」

「・・・そうですか・・・」

「・・・それで、パーツは買ったの?」

「もひひん。これがあればバイクは一時間弱で修理が終わる

「・・・そういうや・・・今日の宿はひりするんだ?」

「・・・そつ・・・」

「それならそつき決まつたわ」

「え・・・ひりうじ」と?「・」

「さつきの泥棒の被害者の女性が、宿の店主だったの・・・。お礼に

「今晚だけタダで泊めてもらひたのよ」ひなた

「そりやす、ゲエー。」それで一気に経費が浮いたな・・・あ、でも飯は

自腹

「それも無料で提供してくれるって・・・

「まじかよ!」ことんすすゲエヤー。」

と、喜びを隠せないレオンは飛び跳ねた。

そして夜になつて・・・

ティファとレオンはその宿の一室にいた。

「へえ・・・意外と内装はしっかりとしているな・・・

シンプルとはいえ、ボロボロではなくしっかりとした構造になつて  
いた。

「しかもまい飯が食べて・・・今日せついているぜー。」

「・・・わうね・・・」

と、ティファは相変わらず素つ氣無かった・・・

「・・・・なあティファ・・・・もひらしだあ・・・置ぬへしよハモ・・・

L

—

ティファは赤い瞳の冷たい視線をレオンに向ける。

「……………分かったよ…………お前がそこまでない…………も」

と、がつくりとレオンはうなだれた。

「・・・もつねるわ・・・」

と、ティファはタンクトップを脱ぎ始めた。

「うわー！」

レオンはひとりで後ろを向く。

て、ティファ・・?な、なにを・・?

「・・・そのまま寝たら、寝汗で汚れるの・・・。ただでさせ着替えが少ないから・・・汚したくないの・・」

と、言いながらも、ズボンも脱いで、タンクトップと一緒に上に吊るしてある紐に干して、ベッドに寝転んだ。

「明日の朝までにはバイクを直しておいてね・・・」

と、ティファはそのまま眠りこなした・・・

「あ、おわ・・・」

レオンは遅れて返事をした。

「・・・・・・・」

レオンは視線をティファに向かなことなくして、そのままベッドに  
寝転んで眠りこなした・・・

「・・・・・・・」

じぱりくじて、レオンは目を覚ました・・・。

と、ぱつぱつ、眼めがさめ、眼めがさめなかつた・・・。

「・・・・・・・」

レオンはまくくつとティファの方を見た。

静かに寝息を立ててティファは寝ており、じつけを向いて横に寝て  
いた。

それによつてティファの少し豊満な胸の谷間がひりむりと見えていた。

「…………」

レオンはとつやかに反対側のほうに向き直つた。

（・・・うう・・・氣になつてしまふがな・・・・・）

レオンはしぶりへ落ち着かず・・・・・

（・・・・眠くないから・・・・・の際にバイクの修理でもするか・・・・・）

と、レオンはベッドから起き上がると、道具が入つたリュックを持って、外に出た・・・・

「…………」

しぶりへして、ティファは目を覚ました。

「…………？」

ティファはレオンがいないことに気付いた。

「・・・あこつ・・・ゼリ行つたの・・・

と、半身を起しつゝ・・・・・

「・・・・・・・

ティファは耳を澄ませて音を聞くと、かちゅかひゅと音が外からしていった。

「・・・外にいる・・・?

ティファはベッドから起き上ると、干していた服を着て、外に出た・・・

宿の傍では、レオンがバイクの修理をしていた。

「・・・・・・・

レオンは真剣な表情で、バイクのエンジンのパーツ交換を行つていた。

「・・・よし・・・。次は

「・・・・起きるの早いのね・・・

と、今度はラジオーターの修理に取り掛かった。

と、ティファが少しして來た。

「まあな・・・出発は早いほうがいいだろ?」

「・・・まあ・・・そうだけど・・・」

「あと少しだ・・・それまで待つてくれ」

と、レオンは作業に取り掛かった。

「・・・そういえば、聞いていなかつたわね」

「なにを?」

少しして、ティファはレオンに聞いてきた。

「・・・レオンが持つそのHS・・・一体どこで手に入れたの?」

「・・・ああ・・・これね・・・貰つたんだ」

「誰に?」

「・・・俺も分からないんだ・・・名前は教えてくれなかつたんだ・

・」

「・・・そり・・・」

「……ティファはじばりへして……」

「……次に聞くけど……あなたはどんな旅をしていたの」

「……それが……」

「……どうなの……?」

「……正直なところ……本当に旅をしてころうわけじゃないんだ……」「……」

「……どういふこと……?」

「……俺はセ・トある施設の出身なんだ」

「……」

「……俺はセ・トある施設の出身なんだ」

「俺はそこでメカニックマンとなるために訓練していたんだ」

「……やう……なの」

「……どうしたんだティファ?なんだか暗い……って、いつものことだけど……」

「余計なお世話よ……私も……その施設の出身よ

「えー? どうなのか……?」「……

「……私は生まれる前の受精卵時に遺伝子をいじられて強化された試験体で、その施設で訓練に励んでいた」

「……そうだったのか……。でも、俺は君を見ていいけど……」

「……追放されたの……」

「え……？」

「……私は不要とされて、その施設から追放された……」

「つ、追放つて……それじゃ……」

「……本当なら……四年前に私は死んでいたと思う……」

「……でも、どうして……」

「……その時に……私はあの人には会った……」

「あの人？」

「……私の命の恩人で、私に力を与えてくれた……」

「そうなのか……」

「……あなたも……追放されたの？」

「……いや、……少し前に……その施設……潰れたんだ」

「え・・?」

「・・・経営が苦しくなつたり、色々と問題とかが生じて・・・少し前に潰れたんだ」

「・・・そつなの・・」

「俺はそれから・・・ある人を探す旅に出たんだ」

「ある人?」

「・・・『フリーダ・エスグランド』・・・俺の姉さんだ」

「・・・姉さん・・・いたんだ」

「ああ・・・。今も姉さんを探す旅でもあるんだ」

「・・・セリフ」

「・・・どうしたんだ・・?」

「・・・私にも・・・双子の姉さんはいるの・・」

「そつなのか?」

「ええ・・。今はどこにいるのか分からぬけど・・。いつかまた会いたい」

「そうか・・。俺も姉さんに会いたいんだ・・。ずっと会つていなからな」

「そりゃ…。あなたの姉さんってどんな人なの」

「…・・優しい人で、頭もよくて、身体能力も相当凄かった…。  
俺の自慢の姉さんだつた…。けど…・・・」

「けど？」

「…・・ある日に・・行方不明になつたんだ…・・」

「行方不明？」

「ああ・・・。当時一緒にいた人の話じゃ・・事故にあつたみたいなんだ・・・」

「事故に・・・」

「…・・でも、姉さんはまだ生きている」

「…・・確証もないのに・・どうしてわざわざ来るの」

「…・・なんとなく・・だよ」

そうじて、レオンは修理を終えた。

「さてと・・・。これで問題なく走行は可能だ」

「…・・話しながらでも・・・作業の手は止めないのね・・」

「まあな・・・。俺は姉さんを見つけ出すまでは、諦めないぜ」

「……………私と似ているわね……」

「……………わうなのか?」

「ええ……私は博士に会いたい……そして姉さんにも会いたい……だから前を見るの」

「そうか……俺たちって似たもの同士だな」

「……………勝手に決め付けないで」

「……………ティファは宿に戻った。」

「……………間が縮まってきたなあ……あと少しつて、ところかな……」

レオンは道具を戻すと、宿に戻っていく……

「・

「……………」

ティファはベッドに腰掛けると、手を顎に当てて考えた。

(似ている……私と……レオが……)

目的は確かに似て、根本的性格も似ていた……

( · · · · )

そして若干頬が赤らむ。

そして朝の九時が過ぎて、レオンはバイクのエンジンを始動させた。

「よし・・・快調だな・・・」

そしてティファアが少しして荷物を持って来た。

「ティファア。いつでもいけるぜ」

「そう・・・」

なにやら少しティファアの様子が変であった。

「・・・どうしたんだ?」

「・・・なんでもない・・レオ」

「・・・え?」

レオンは一瞬理解できなかつた。

「い、今・・俺のことを・・レオって・・

「・・・別に・・呼んでもいいんでしょ」

「ま、まあ・・やうだけど・・」

レオンは意外なことに少し驚いていた。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

そしてしばらく沈黙が続くと・・・・・

「そのトラックを止めてー！」

と、女性の叫びがまたした。

そこでは、荷物を積んだトラックが走っていた。

運転席には昨日逮捕されたはずの男が乗っていた。

びつやら署から逃げ出したようだ。

「やれやれ・・・」の町は騒々しいな

「同意見だわ」

そして、一人は右手のみにT-15アーマーを局部集中展開した。

レオンの右手にはスナイパーライフルが握られ、ティファの右手には『バーストレールガン』が握られていた。

そしてトラックが二人を横切ろうとした瞬間、二人は同時に砲撃し、トラックの右のタイヤすべてを撃ち抜いた。

トラックはバランスを崩して、横転して地面を滑りながら止まった。  
・

「次からは……ここには来たくないな

「……そうね……。こいつは……気が合つたのね」

「……そうだな」

そして、一人は四輪バイクに乗り込んで、そのまま走り出して、町を出て行つた……

Story5 二人の間（後書き）

・・・最近一言が少ない・・・

## Story シュヴァレッシュ・ハーゼ

それから走り続けて数田が経つた・・・

「よっしゃー・・・ついに来たぜ・・・ドイツー！」

レオンはバイクを止めると、高らかに声を上げた。

「ドイツねえ・・・」

ティファはいつもの通りであつた・・・

「何だよティファ。もう少しテンション上げていこうぜーーー！ドイツじ  
やまだトライアル中の第三世代型のH-Rがあるんだぜーーー！」  
一度でもいいから見てみたいぜーーー！」

と、一人でテンションが上がっていた。

「・・・あんたって・・・機械オタク？」

何やり冷たい視線でティファは言っていた。

「な、なんだよその言い方……」

「……でも、軍事機密なそれを簡単に見られるわけがないでしょ」

「せりや・・・せりやだけど・・・でもその関連施設を遠くから見ることはどうできるや」

「・・・捕まつても責任は取れなー」

「大丈夫さ・・・簡単には捕まらないさー。」

と、レオンはバイクを一気に走り出して、荒野を駆けて行った・・・

そしてしばらく走つてみると・・・

「なんだ・・?」

レオンは遠くにあるものを見つけた。

「・・・何かの施設のようね」

と、結構遠いのにティファは見えていたようだ。

「・・・結構目が良いんだな・・・」

「・・・私の正体は言つたでしょ」

「・・・・・・そうだったな。じゃあ少し近付いてみるか

と、レオンはその施設に向かつて行つた・・・・・

「・・・おお・・・凄いな・・・」

その施設に近付いてみると、そこには結構ガラーンとしていた。

「何かの研究所のようだね」

「そうだな・・・。でもなんの研究所だ?」

「私が知るわけがないでしょ」

「いや、それは分かつてゐるけど・・・。とりあえず近付いてみるか  
?」

「いや」

「・・・即答で否定するなよ」

そんなやり取りをしていると・・・・・

「…………？」

するとティファは上を見上げた。

「どうしたんだ？」

「…………なにか……来る」

「え・・・？」

レオンはティファの視線の先を見た。

「…………なんだあれ？」

すると、上空に三つの影があった。

そしてその影は物凄いスピードでこちらに向かってきた。

「な、なんだつ！？」

その影は前の施設に向けビームを放った。

「攻撃されている！」

「レオー！」

「分かつてる！」

レオンはとっさにバイクを走らせて、施設に向かつた。

向かつてこる最中も三つの影は攻撃をしながら施設に近付いていった。

そしてレオンとティファは施設内に入り、中央付近で止まつてそれを見た。

「・・・これは・・・」

施設中央には、三体のH.SがP.I.Cで浮いていた。

三体とも『全身装甲』であり、カラーリングは黒色系であり、細いアーマーがいくつか繋がった感じに装着されており、頭部には赤い一つの目が光っていた。

「H.Sつらせ・・・」

レオンは二つでもH.Sを展開できるようにした。

「

しかし三体のH.Sは役目を終えたかのように、レオンとティファを無視して上空に飛び上がり、そのまま遠くへと逃げていった。

「あいつら・・・H.Sの施設の破壊だけが目的だったのか・・・」

「レオ・・今はそんなことはいい・・・とりあえずここの人達を」

「分かつた

そして一人は辺りに散らばり、生存者を探した・・・

「・・・これで全部だな」

そしてレオンとティファは生存者全員を中央に集めて手当をした。

「・・・しかし・・・」んな派手にやつておいて死傷者がゼロって・・・

」

「あくまでこの施設の破壊だけが目的だったようだな・・・

と、辺りを見回していると・・・

「・・・・・なあ、ティファ・・・」

「なに?」

「・・・・俺たちって・・・疑われるかな・・・

「・・・・・さあね・・・」

と、一人の視線の先には、少数だがドイツの兵隊が来ており、その中には一体のI.Dがいた・・・

「そこの一入・・・手を上げろ

と、HISを身に纏った眼帯の女性が言ったので、ティファは後ろを向いたままで両手を上げて、レオンは正面を向いて両手を上げた。

「……で何をしている」

「俺たちはただ・・・通りかかっただけなんだよ・・・それでここの人達を助けていたんだ」

「・・・・民間人がここにいる時点で非常に怪しい・・・」

女性の警戒心は沈まなかつた。

(簡単には信じてもらえないか・・・まあ、無理もないか・・・)

「ヤーの女・・・前を向け」

「・・・・・」

ティファはゆっくりと前に振り向いた。

「・・・・・?」

すると、女性は驚いたように目を見開いた。

「ボーデヴィッヒ少佐・・・?」

そして女性は何度もティファを見た。

「・・・い、いや・・・似ているだけか・・・」

そして女性は「……『シュヴァレッショア・ツヴァイク』を解除して、一人の元に寄つた。

「……すまないが……事情聴取を受けてもらひたい」

と、わざとより威圧感が無くなつた気が……

「それで疑いが晴れるのなら……みたこと全て話します」

そして、レオンは少しおどおどした感じで言った。

「……しかし……では話しひくから……一旦我々の基地に戻つて話を聞こへる……一人はそれでいいな」

「……はー」

「私もそれでいいです」

そうして、ティファとレオンは女性に連れられていった……

「……それで全部です」

と、レオンは見たことすべてを女性に話した。

「ふむ・・・大体のことは分かった・・・」

と、女性は納得したようだ。

「紹介が遅れたな・・。私はここ『シュヴァレツェ・ハーゼ』副隊長のクラリッサ・ハルフォーフ大尉だ」

と、女性・・・クラリッサは自己紹介した。

ショートヘアの暗い青の髪をしており、左目には黒い眼帯をしているが、部隊内では全員黒い眼帯をしており、クラリッサは部隊内では年長だと思われる。

「副隊長ですか・・」

「君は?」

「俺はレオン・エスグランドです。ある人を探して旅をしています

「・・・人探しの旅か・・・。それで・・・君は?」

と、クラリッサはなぜかティファードだと聞きづらそうにする。

「・・・ティファ・ボーテヴィッヒです・・・。レオと同じく人を探しています」

「・・・やはり・・・」

「……せういえば、なぜハルフォーフさんはティファの前だとなんだからおどおどしているのですか？」

「……とある人物にそっくりだからだ」

「とある人物？」

「……聞きますが……あなたに姉妹はいますか？」

「姉妹……ですか？……はい……双子の姉がいます」「姉妹……その姉の名前はもしかして……ラウラ・ボーデヴィッシュではありませんか？」

「……姉さんは知っているのですか！？」

「ええ。ラウラ・ボーデヴィッシュはこの『シュヴァレツェ・ハイゼ』の隊長です」

「……姉さんが……」

「だからあの時ティファを見て少佐って呟いたのか

「ええ……しかし双子の姉妹のなら顔が物凄く似ていてもおかしくはありませんね」

と、クラリッサは納得したようだ。

「姉さんは、今どこに……？」

「ボーデヴィッシュ少佐なら、ここから遠く離れた極東にある『IIS学園』に行かれた」

「IIS学園……？」

「あのIIS学園にか……。俺も一度行ってみてえな……」

と、レオンは少し興奮していた。

「……再度聞くが、あの時研究所を襲ったのは間違いなくIISだつたのだな？」「

「はい。しかし全身に装甲があつて、全く見たことがないIISでした」

「そうか……」

「それで、そこの研究所の職員は全員無事だったのですか？」

「心配はない。多少の怪我とかはあるが、命に別状はない

「そうですか……よかったです……」

と、レオンはホッと安堵の息を吐く。

「……しかし……一体なんの研究所だったのですか？」

「……最近の調査で分かつたことだが……その研究所では極秘で『V-Tシステム』の研究が行われていたことが判明した」

「V-Tシステム？」

「知っているぜ。確かにISと操縦者のシンクロ率を上げるための補助システムだが、あまりにも危険なためにアラスカ条約で開発はおろか、研究も禁止されたシステムのことだよ」

「よく知っているな・・・。男子でそこまで知っているのなら尙更だが・・・」

「いやあ・・・俺はメカニックマンですから・・・。こいつに何とかある程度知っていますよ」

「・・・まあいい。彼の言つ通り、V-Tシステムはアラスカ条約で研究開発が禁止されている・・・。しかしそれが密かにボーテヴィッツヒ少佐のIS『シュヴァレッショア・レーゲン』に搭載され、暴走を起こしたのです」

「暴走を・・・」

「幸い暴走は学園の専用機持ちによつて止める」とができるたそうですが

「す」

「そうですか・・・」

「しかし、我々でも知らないはずの情報をなぜ他の誰かが知つていたのか・・・そこが問題だ」

「・・・そうですね・・・」

「・・・それに、そここの研究所ではつい最近事件が起つたばかりな

のだが・・・

「どうなんですか？」

と、レオンが興味津々で聞いてきた。

「その研究所では私が使用する『IS『シユヴァレッシュ・ツヴィアイク』とボーデヴィッヒ少佐が使用する『IS『シユヴァレッシュ・レーゲン』の姉妹機が作られた場所であつて、そこでは両機のデータを元にして製造された試作三号機が開発途中だつたのです」

「試作三号機？」

「ええ。しかしその開発途中だつた試作三号機は謎の組織によって『ア』と奪取されてしまつたのです」

「そりや・・・かなりの大損ですね」

「その通りだ。ただでさえISの『ア』は少ない・・・このドイツには僅か三基しか提供されていない」

「なるほど・・・今ではレーゲンとツヴィアイクのみ、ということですか・・・しかし試作三号機ってどういいうものだったのですか？」

「それは答えることはできない・・・國家機密に匹敵する極秘事項だからな」

「やうですね・・・はあ・・・」

と、レオンはがっくりと肩を下げる。

「しかし、その試作三号機はレーゲンとツヴァイクのデータを使って製造されてということだから、それらの系列に入っている機体だ」

「なるほど……いわばレーゲンは試作一号機で、ツヴァイクは試作二号機っていう立場で、それらのデータを用いて試作三号機が製造されたと言うことですか？」

「そうなるな」

「くえ・・・やつぱりこうして色々と深いなあ・・・」

と、レオンは畠を輝かせていた。

「・・・といひで、君たちもこうを持っているのだろう」

「「え・・・?」」

一人は同時にきょとんとした。

「民間人にしてはこうのことを見抜いているな・・・。どうもこうを持つていてるからそれくらいの知識があると言つ感じだな」

「ま、まさかな、なあティファア」

「・・・・・・」

「・・・・あれ?」

「簡単に見抜かれましたか・・・。確かに私たちは自身のHISを持っています」

「そうか・・・」

「つて、ティファー！？何を言つてんだよ！」

レオンは慌てていた。

「安心はしない。別に上層部やHIS委員会に報告するつもりはない。ただ気になつただけだ」

「そ、そうですか・・。しかしなぜ俺も持つて居ると思ったのですか？HISは女にしか使えないのですよ？」

「確かにそつだが、異例なことが起きたのなら、別に起きてても不思議じゃない」

「・・・それって、織斑一夏のことですか？」

「そつだ・・・。そのような一例があつたのなら、別に他にいても不思議ではない」

「・・・確かに・・・そりですナビ・・・」

「まあしかし、不思議なことがあつたものだな」

「・・・どういふことですか？」

「その織斑一夏といふのは、かつて我々を鍛えた織斑教官の弟だと

「言つことだな」

「へえ・・・。不思議なことがあつたものですね」

「ああ・・・。しかもつい最近、ボーデヴィイッヒ少佐から連絡が来た」

「姉さんから?」

「ああ。その内容と言つのが・・・私も驚いたよ・・・ボーデヴィイッヒ少佐に好きな人ができたといつことだからな」

「・・・へ?姉さんが・・・?」

と、ティファは呆然とした。

「更に、織斑教官のほかに憧れの人物もできたと言つのがあつたからな」

「憧れの人物?」

「ああ・・・。確か名前は・・・レイ・ラングレン・・・と言つていたかな」

「レイ・ラングレン?」

ティファとレオンは頭の上に『?』を浮かべて首をかしげる。

「どういう人物かはまだ聞いておりませんが、事実上ボーデヴィイッヒ少佐より相当強いお方なのでしょう・・・。それと、その人も男性だそうです」

「えつー、まだいたのですか？ＩＳを使える男子が・・・」

「そのようです」

「へえ・・・じゃあ今のところＨＩＳが使える男子は三人か・・・。と言つても公になつてゐるのは一人だけ・・・か」

「・・・・・・・」

そんな中、ティファは未だに悩んでいた。

「どうしたんだティファ？」

「・・・・レイ・ラングレン・・・・。どうも引っかかる・・・」

「・・・俺もそう思つていたんだよな・・・。どこかで聞いたような気がするんだ・・・」

「・・・・・・・」

「まあ、今考えたつて答えは出なこと思つぜ」

「・・・・そうね」

「それでハルフォーフさん・・・。事情聴取はこれで終わりですか？」

「ああ。君たちを疑つてすまなかつたな」

「いえいえ。疑いが晴れて」あらも助かりました

「せうか・・・君たちの証言は今後の調査の役に立つだろ？」「

「やつでありますね」

「それと、私と話したことほむちるん他無用だ」

「分かりました・・・俺はいつ覗えても口は堅いまつでしから

「やうか・・・では、君たちとまた会える日を待つておる」とじ  
よつ

「はー！俺たちもまた会える日を楽しみにしてこます」

「・・・私も・・・楽しみにしてこまー」

「・・・では、途中まで見送りやつ

と、三人は立ち上がると、部屋を出た・・・

「いやあ・・・見送りな上、お礼にこんなものまで貰つてありがた  
いですね」

と、レオンとティファは四輪バイクから、新たに提供された軍用ジ

ープに乗っていた。

後ろの一台には二人が乗ってきた四輪バイクと、予備のガソリンが入ったポリタンクが三つ載せられており、そこに一人の荷物を置いていた。

「なあに、疑つた時の謝罪や情報提供をしてくれたお礼もある」

三人は軍事施設の出口におり、クラリッサ一人で見送りに来ていた。

「・・・では、まだどこか出会いましょう・・ハルフォーフさん」

「そうだな・・。それとティファ」

「何でしょつか?」

「・・・ボーデヴィッシュ佐に・・会えるといいな」

「・・・はい」

「それと、君たちの次の目的地だが、ここから東を進んでいけば、一日半で着くはずだ」

「そうですか・・・。ありがとうござります」

そして、レオンはアクセルを踏み、ジープで荒野を駆けていった・・

クラリッサはその姿が見えなくなるまで手を振つた・・



## Story 6 シュヴァレッシュ・ハーゼ（後書き）

研究所を襲ったISのイメージとしては、原作や漫画の『マーレム？』がモデルです。

「はあああ・・・・暑い・・・・」

と、森道のど真ん中でジープを止めて、レオンは团扇わんせんで扇いだ。

なぜこいつなつたかとこいつと・・・

「全く・・・・調子に乗りすぎよ・・・。ラジエーターだけで冷却ができないほどに走らせる馬鹿がどこにいるの」

「うう・・・・」

レオンはジープが手に入ったことで気持ちが弾み、派手に走らせた結果、オーバーヒートを起こした上、ラジエーターだけでは冷却ができないので、今は自然冷却中・・・

「じうするの」

「・・・とつあえず、日陰に入れようぜ・・・・。そうすれば少しは冷却時間が短縮できる・・・」

そして、レオンは一人でジープを押して、ティファは腕を組んで助手席に座っていた。

「なんでお前は手伝わないんだよー。」

「あなたの責任でしょう」

「うう・・・」

レオンは言ひ返せなかつた・・・

(「うう・・・相変わらず冷たすぎる・・・」)

心の中で愚痴りながらも、ジープを押していくつた・・・。

「はあ・・・はあ・・・ようやく着いた・・・」

しばらく押して森林の田陰にジープを入れた。

レオンはジープのタイヤにもたれかかつて座つた。

「・・・」

と、レオンが団扇で扇ごどごると・・・

「・・・レオ」

「なんだ？」

「いつでもエサを展開できるよ！」

「？なんでだ？」

「いいから」

と、ティファはジープから降りると、辺りを見回す。

「…………」

森林が生い茂る辺りでは、なにかが動いて木々の音がした。

「…………」

すると、ティファの後ろから何かが飛び出た。

「ティファ！」

レオンはとつさにエサアーマーを展開して、襲撃者に飛び込んだ。

そしてそのままタックルをして襲撃者を跳ね除けた。

「大丈夫か？」

「…………あれくらい……私は気付いていたわ」

と、ティファはエサアーマーを展開して、右手に『バーストレールガン』を開いた。

「ひでえ・・・助けたのに・・・」

そう愚痴りながらも、レオンはスナイパーライフルを展開した。

そして、襲撃者は体勢を立て直して、レオンたちに向き直る。

「こいつは・・・」

その襲撃者は異様な姿であった。

全体暗いグレーのカラーで、『全身装甲』で、細長い頭をして、口元にはチューブのようなものがあり、バイザーのカメラアイの上には、更に赤い二つのカメラアイがあり、胴体は長めで、肋骨のようなモールドが入っており、両腕には四本の爪があり、その中央に銃口が見られた。足は逆関節であると、従来のエリとはかけ離れた姿であった。

「こいつも無人機ね・・・。こいつの中に生体反応がない

「そりか・・・なら、手加減無しで攻撃ができるな」

と、レオンはスナイパーライフルを放った。

その襲撃者は見かけによらず素早い動きで避けた。

その直後にティファがレールガンを放つも、襲撃者は素早く動きながら両腕の銃で攻撃してきた。

「こいつー」

レオンは背中のキャノンを展開すると、襲撃者に向け放った。

襲撃者はそのまま攻撃を避けるも・・・

「ティファ！」

すると、ティファは一気に近付き、左腕のブレードを展開して、振り上げた。

「はあああつ！」

そしてブレードを振り下ろすも、襲撃者は右腕のクローデブレードを掴み止めた。

「ー。」

襲撃者はそのままティファの右腕も片方のクローデ掴むと、そのまま横に広げていった。

「くつ・・！」

ティファは痛みで顔が引きつる。

「ティファ！」

「・・・・。」

すると、後ろではスナイパーライフルを構えたレオンがあり、そのままトリガーを引き、弾丸を放った。

ティファはとっさにそのまま腕を軸にして後ろに回転した。

その直後に襲撃者の胴体に弾丸が直撃した。

「はああああっ！」

ティファはそのままフェイクライドの右かかとにあるダガーで襲撃者にかかと落としのよつにして切りつけた。

それによつて襲撃者は後ろに数歩下がり、ティファを離した。

「くつ・・・・なんて硬さだ」

弾丸が直撃した箇所には傷が少し入る程度にしかなかつた。

「かなりの強敵だな・・・」

「そのよつね」

と、一人は身構えるも・・・

「

その襲撃者はそのまま後ろにジャンプして森の中に消えていった。

「逃げていぐ？」

レオンはライフルを構えた。

「わひにこわ。どの道にじからじや当たらなこわ」

「・・・・・」

そして、レオンがライフルを構えた……

「チヒストオオオオツ！－！」

「「－?」「

すると、森の茂みから誰かが飛び出でた。

「な、なんだ！－？」

レオンはとっさに回避した。

そのものは容赦なく襲い掛かつて来た。

しかもその姿と血のが……

「な、生身で！－？」

そのものは手刀を身に纏わず生身でレオンに襲い掛かつて來ていた。

両手で持つて居るのは長い刀身を持つ日本刀であった。

「はああああつ！－」

しかも素早い動きでどよどよレオンを追い詰めていった。

「ちよ、ちよっと……ま、待つてくれよー。」

「問答無用ー！」

と、相手は聞く耳を持たなかつた。

「一刀両断！」

そしてそのものはレオンのスナイパーライフルを切り裂いた。

「へ、うそだろー。」

レオンはとっさに後ろにバックステップして距離を取つた。

「だから待つてくれよー。」

と、レオンは必死にそのものを止めた。

「…………」

そしてそのものはティファとレオンを見た。

「…………」

そしてそのものは手にしていた刀を背中に背負つている鞄に戻した。

「じゅやん嘘はついてはいけないようだな……」

「いやだから、最初からそういう言ひ方でいるのに……」

レオンは少し呆れていた・・・

「先ほどは失礼した・・・。」最近襲撃者が多くてな、少し神経質になつていったんだ」

そうして、レオンとティファはそのもの・・といつより女性に連れられてとある村に入り、彼女の家にいた。

「そうだったのですか・・・」

と、レオンは出されたお茶を一口飲んだ。

その女性は白髪・・もとい白銀の色をした髪で、背中まで伸びしているが根元で紐が何かで結んでいた。年はティファやレオンよりは年上と思われ、キリッとしており、瞳の色は黒曜石のように黒かつた。左耳には黒い眼帯をしており、その服装と言つのが・・・剣道の白い道着を着て、紺色の股がついた袴を穿き、その上に剣道の防具をつけていたが、唯一両手に付ける籠手代わりに黒い指先が開いた皮手袋をつけて、頭には青い額当てが付けられており、そのほかの防具も青かつた。

背中に背負つっていた刀は隣にある刀掛けに置かれていた。

「申し送れましたな・・。私の名前は『葛二原明日羽』と申します。

くすみはるあすは

あなた方は?「

「私はティファ・ボーデヴィッシュヒ・・・」

「俺はレオン・エスグランドって言こます・・・。せつにえは葛二原さんは日本人なんですか?」

「明日羽でいいぞ。確かに私は純日本人だ」

「純日本人つて・・・まあいいとして、どうしてこんな辺境に?」

「武者修行といづやつです」

「武者修行?」

「ええ。私の家は代々武士の系統でしたから、代々こうこう修業に出ていっているのです」

「それだったら、どうしてこの村に留まっているの」

「実は最近この辺りで行き倒れてしまつて、この村人に救われてからは恩返しのために用心棒をやつしているのです」

「はあ・・・・・。しかし明日羽さんの髪つてどうして白いのですか?脱色でもしているのですか?」

「いや。これは『先祖からの遺伝と聞いています

「『』先祖?」

「はい。遠い」先祖の一人は私のよつと白い髪だったそうですが

「あ・・・結構遠い遺伝ですねな・・・」

「そうですね」

「・・・しかし、明日羽さんは凄いですね。生身でヒュウと対等に戦えるのですから」

「これも、修練の結果ですかな」

「修練でヒュウと戦いつて・・・」

「まあ、そこまで活用できる」とはあまりないのですが、持つておくと役に立つ時があるんですね」「す」

「役に立つねえ・・・」

「やういえば、明日羽さんが使うその刀って、ヒュウの武器ですか?」

「おや?人目でやう分かるのですか?」

「いや、俺のヒュウのスナイパーライフルを切り裂いたからですね。あれはヒュウの武器でも中々壊れないものなんですよ」

「やうですか・・・それは申し訳ござりませんでした」

「まあ、修理はできるからいいですけど・・・。その刀は凄いですね」

「ええ・・・。亡き師匠が遺してくれた刀ですから」

「師匠？」

「……話は変わりますが、私は六年前に両親を目の前で殺されました」

「……」

「両親を失った私を引き取ってくれたのが、父の知り合いであつた師匠でした」

「どんな人だったのですか？」

「……優しい……というわけではありませんでしたが、独りぼっちになつた私を大切に育ててくれて、その間に武道を習つたりしました」

「……そつなんですか」

「でも、その師匠も……一年前に病死しました……」

「……」

「師匠は死ぬ直前に、私にあの刀……『獅子王剣・真』しじおうけんまことを遺したのです……」

「……そつだつたのですか……」

「……私は武者修行の旅と、言っていますが……本当のところは両親の仇を取りたいのです」

「両親の・・・仇」

「忘れもしない・・・両親を殺した・・・鋼鉄の孤狼ベーオウルフを・・・」

「鋼鉄の孤狼ベーオウルフ・・・」

すると、ティファは何かを考えた。

「・・・ティファ殿？ 何か心当たりがあるのですか？」

「いや・・・なんでもない」

「そうですか・・・」

明日羽は少しがッカリとした感じであった。

ドオオーンッ・・・！

「！？」

すると、外から爆発音がして、三人はとつさに外に出た。

「あれは・・・」

外に出ると、村を何者かが襲っていた。

それは先ほどの襲撃者・・・『インビジット プロテクト』であった。

しかもわざわざよつと一体増えて、計三体いた。

「あいつ・・・仲間を連れて戻つてきやがつた！」

「全すべし！」こやつね・・・

「・・・」

「明日羽をさ、下がつてください。」

「し、しかし・・・」

「HSIはHSで対抗します！行くぞティファー！」

「言わねなくても

と、ティファアとレオンは走り出すと、そのままHSを展開してインビジットに向かつて行つた。

「ぐつ・・・まだ『あれ』を起動することができない・・・しかし

「

明日羽は背中に背負つている獅子王剣・真を見る。

「黙つて・・・見るわけには行きません」

明日羽は刀の柄を持つたままインビジットに向かつて行つた・・・

「トンファーセットー！」

レオンは両手に刃が付いたトンファーを展開して、インビットに向かっていく。

「オラオラオラオラー！」

そしてインビットに殴りつけしていくが、インビットの硬い装甲でダメージは薄かった。

「くそつ！かでえ！」

「レオ、伏せて！」

すると、レオンの後ろでは『四連ランチャーリー』を肩に担いだティファの姿があった。

そしてティファはミサイルを一斉発射した。

「うわっ、あぶねっ！」

レオンはとっさに横に避けたが、ミサイルはインビットに直撃して爆発した。

しかし、煙が晴れると、インビットにはダメージは薄いようだった。

「うつー無駄に硬い・・

ティファは因連ランチャーを収納すると、背中のキャノンを展開してインビットに向け放った。

しかしインビットは素早く避けてしまい、隣ではもう一體のインビットとレオンが交戦していた。

「くわー・じうすれば・・

「・・・・・・

すると、ティファはサブマシンガンを展開して、インビットに攻撃しながら観察した。

(・・もしかすると・・)

ティファは何かに気付いたようだ。

そして両腕のブレードを展開してインビットに切りかかる。

しかしインビットは両腕のクローディティファの腕を掴み取った。

「じゅぢゅ・・・あなたには学習能力は無いよしうね・・

と、ティファは不敵の笑みを浮かべた。

そして背中のキャノンを両肩のカメラに向け放ち、カメラを破壊した。

かねど、インビットはヒラー音を出し、千鳥足になつた。

「やはり・・・田をやられたら抵抗力が無くなるか」

そしてティファはインビットを蹴り、突き放した。

「レオ、ここからの両肩のカメラを狙つて！それがここからの弱点よ！」

「分かった！」

レオンは右手にエネルギーを集中させた。

「レギゼット・ビームナッシュオツ！」

と、右拳を突き出すもインビットはジャンプして避けた。

「それ待つていたぜ！」

と、レオンは背中のキャノンを直上に向けた。

「ツインビームキャノン・・・メガショットツー！」

そしてキャノンから高出力のビームを発射して、ビームはインビットに直撃してバランスを崩し落ちていく。

「どうやあつ！」

レオンはその場を蹴り、両手に大型ハンドガンを展開して、至近距離でインビットの両肩のカメラに向け発砲した。

それによつて一一体目も千鳥足になつて動きが鈍つた。

「よしつー最後の一體だ！」

と、レオンとティファは最後の一體に向き直る。

「

すると、インビットは両腕のハンドガンで一人に向け攻撃してきた。

「ぐつー！」

一人はインビットからの攻撃を避けていると・・・

「はああああつー！」

すると、インビットの右側から明日羽が飛び出ってきた。

「明日羽さん！？」

インビットは気付くと、明日羽に向け発砲していった。

「ふんつー！」

すると、明日羽は獅子王剣・真で弾丸を切り払つていった。

「す、すげえ・・・」

レオンは唖然とした。

そして素早いフットワークでインビットの攻撃を避けていった。

「はああああっ！」

そして近くまで来ると刀を振り上げて、インビットの右腕を切断し、そのまま両肩のカメラを切り落とした。

「チエストオオオオッ！…」

そしてそのまま縦に振り下ろして、インビットを真つ二つにした。

「我が獅子王剣に・・・断てないものはない・・・」

明日羽が刀を鞘に戻すと、後ろでインビットが爆発した。

「す、すげえ・・・」

「・・・そう・・・わね」

二人は呆然として明日羽を見ていた・・・

レオンは地面でじたばたしていた一体のインビットの動力ケーブルをブレードで切断して、インビットを機能停止にさせた。

「これでよし、と」

「ふう・・」

そうしてレオンはEISを解除して、同時にティファもEISを解除した。

「しかし・・・明日羽さんって・・物凄いんですね・・・」

と、レオンは隣で獅子王剣・真の刀身を確認する明日羽に聞いた。

「あれくらい造作もないことです・・・。それに明日羽さんっていつのは固いですね・・。普通に呼び捨てでいいですよ」

「呼び捨てって・・年上の人を呼び捨てにするのはちよつとい・・・

「・・やはり年上に見えますか?」

「へ?」

「私は十六なんですけど・・・」

「・・・じゅ、十六?」

レオンは皿をぱちくりとした。

「俺たちと同い年だったのですか?」

「と、こつと、レオン殿とティファ殿は十六なのですか?」

「まあ、やうだけど」

「そうね

「もうだつたのですか・・・」

と、何か共感したようだった。

「しかし、ティファニア殿とレオン殿はこれからどうあるのですか?」

「俺たちは今後旅をするんです・・・あの時はジープの冷却中だつたんだ」

「ああ・・・だからあの森にいたのですね・・・」

「まあ、もうなんですよ」

「もうね・・・。まだ根に持つっていたのかよ・・・」

「うう・・・。まだ根に持つっていたのかよ・・・」

「ハハハ・・・樂しかったですね」

「いや・・・乐しかった・・・」

やつして少し賑やかになつた・・・

「なんだか・・別れはつらうですね」

そうしてティファ・とレオンは出来をじみつとつて、明日羽さんの見送りに来ていた。

「一緒に・・来れないんですか?」

「申し訳ないません・・・。まだ酒を返しかれてこなーのド・・・」

「もうですか・・・」

やしー、レオンせぜぜへ帰るで・・・

「なあ、明日羽」

「なんでしょうか?」

「・・・いつかまた・・・道が重なるひつて・・あるのかな・・・」

「・・・もうすね・・・。いつかまた・・重なる時が来ますよ

「・・・もう」

と、珍しくティファが話に入ってきた。

「じゃあな・・・。明日羽」

「わかったら・・・。また・・ビックでお会いしましょウ」

そうして、レオンはジープを走らせて行つた・・・

「・・近い日に・・・また会いましょう・・・ティファ殿・・レオ  
ン殿」

明日羽はジープが見えなくなるまで見つめた・・・

「うーん……。やるやうに次の町に着くはず何だナゾな……」

と、レオンは運転しながらGARAGEを見る。

「まあ……やっぱり任せたんだじゃなかつた……」

ヒ、トライファは手を額に当ててため息をつく。

レオンは粗鄙な方向音痴である……。つまりは道に迷っていた……

「レオに任せた私が馬鹿だつた……」

「おこおこ……ひぐれこと言つててこら……」

「誰のせいだと黙つててこるの」

ヒ、ヤロツとレオンを睨む。

「うーん……とつあえず……前に進むしかないな

レオンはとつあえず並のない道を進んでいくのだった……。

「はあ・・・エリヤー・・・」

「あんたが言うつな・・・」

と、一人は完全に道に迷っていた・・・

荒野のど真ん中・・・辺り一面土とちょっとだけ生えている雑草のみ・・・

「そもそもG P Sがあるのになんで迷うのよ」

「俺にもわからぬ・・・」

「・・・呆れる・・・」

「はあ・・・。・・・ん?」

辺りを見回していたレオンはとあるものを見つける。

「なんだ・・・あれ?」

「・・?」

ティファもその方向を見た。

ぼやけているが、地面に穴が開いているように見えた。

「行ってみるか

「なんでそうなるの」

と、ため息をつくもレオンはその場所にジープを走らせた・・・

しばらく走って・・・

「これは・・・」

レオンは近くにジープを止めた。

そこには、とてつもなく大きなクレーターがあつた。

「何て大きさだ・・・。推測でも半径は十キロ近いぞ・・・

「いや・・・それ以上ね」

そうして一人はジープから降りて巨大クレーターを見る。

「すげえ・・・。隕石でもこんなに大きなクレーターはできないぜ・

「・

「確かにそうね・・・。でも隕石だったりクレーターの周りに山みたこができるはずか・・・」

「やひこえば・・・そつだよな・・・」

「・・・まるで何かが爆発して・・・えぐられたって感じね・・・

「・・・確かに・・・」

と、レオンがあごに手を当てて尋ねてみると・・・

「・・・・・・」

するとい、ティファに異変が起きた。

「ティファ？」

レオンが見ると、ティファはふりついていた。

「どうしたんだ」

「・・・・・」

そしてティファは後ろに倒れた。

レオンはとっさに動いて、ティファを受け止める。

「ティファ！」

「ティファ……どうしたんだよー? おい!」

と、レオンは揺ゆぶるも、ティファは気を失っていた。

「こきなりどうしたんだよ……。と、とりあえずここから離れよう……」

レオンはティファを抱えてジープに乗り込んで、そのまま走らせた・・・。

そしてクレーターの中央には・・・白い光が鈍く輝いていた・・・。

「・・・大丈夫かな・・・」

と、あのクレーターから結構離れた場所で、レオンはジープの端にシートの端をつけて反対側に棒をつけて簡易型のテントを作り、その中にシートを敷いてティファを寝させていた。

「せつしきよつ落ち着いた感じだけビ・・・まだ油断はできないな

そしてレオンは冷水をつけたふきんをティファの額に置んで乗せた。

「もう夜か・・・。とりあえず火を起ししておつか・・・

と、レオンは外に出て焚き火の準備をした・・・・

「・・・・・・・」

しばらくしてティファは田を覚ました。

「うーは・・・・・」

そして半身を起しすと、額に置かれていたふきんが落ちる。

「・・・・・」

横を見ると、レオンが焚き火を起して魚を焼いていた。

「おひ・・・。ようやく田が覚めたかティファ」

「レオ・・・・」

「全く、驚いたぜ。いきなり倒れるんだから、心配したぜ」

「・・・じめん」

「え?」

レオンは意外なことにちょっと驚く。

それは、ティファアが素直に謝ったことである。

「意外だな・・。お前が素直に謝るなんて」

「・・何か悪いの」

「い、いや。珍しいって思ったから」

「・・やつ」

と、いつも通りになつた・・・

「それにしても、一体何があつたんだよ」

「・・・・・・・」

ティファアは黙る。

「・・・なあ・・・一体何があつたんだよ」

「・・・あなたには・・・関係ない」

「な、なんでだよ」

「別に・・あなたが知らなくても私は困らない」

「・・俺は困る」

「・・・・・」

「ティファがこんな状態で俺は何も知らないから何も出来ないなんて・・・俺は嫌だ」

「・・・あなたに・・何が分かるの」

「分かるさ・・。人の気持ちぐらい分かるひとつとする。それが仲間つてもんだろ」

「・・・仲間」

「何だつて相談が大切だろ？仲間には助け合いが必要だ」

「・・・・・」

「それが・・あの『レジエンド』が言っていたことだよ」

「レジエンドが？」

「ああ。レジエンドは何より仲間を大切にしていたんだ・・。だからあんなに強かつたんだよ」

「・・・・そう・・」

「俺もそれに習つて仲間を大切にしようと思つてゐるんだ」

「・・・・・」

「いくらティファアが俺にそういう態度を取つたって、俺はティファアを大切な仲間つて思つてゐるさ」

「…………」

すると、ティファアの頬が若干赤らむ。

「…………？」

「なんでもない」

「そりゃ・・。なら飯は食えるか？さつき近くにあつた川で獲つた魚だけど、一応食えるぜ」

「…………」

と、ティファアは立ち上がるとレオンの横に座つて串に刺さつた魚を手に取る。

「…………」

じろじろと見てからティファアは一口頬張る。

「…………おいしい」

「だろ？食べる時に食つたら、困らないぜ」

と、レオンも魚が刺さつた串を取り、食べていく。

「…………」

ティファはチラシヒレオンを見て、再び魚を食べる。

「あ・・・食つた食つた・・・」

と、レオンは腹をさすつて後ろに手をついた。

「・・・・・・」

「あ・・・そひひ寝るか」

「そうね

と、レオンはテントの下に毛布を敷く。

「あ・・・結構ぬぐいな

と、レオンは寝ると、毛布を掛けた。

「・・・・・・・・」

すると、ティファはじょじょへると・・・

「・・・・・・・・?」

そしてティファはレオンの横に寝ようとする。

「て、ティファ？」

レオンは半分混乱していた。

「今日だけは……一緒に寝かせて」

「な、なんで……？」

「……理由はないわ……ただ……なんとなく」

「……別に……いいけど……」

「……そう」

そうしてティファはレオンの隣に寝た……

「……」

レオンは落ち着かなかつた。

(び、びつしたんだよ……ティファのやつ……)

ティファは静かに寝息を立てて寝ていた。

(「う・・・お、落ち着くんだ・・・落ちつ・・・）

すると、寝ているものもティファがレオンに抱きついてきた。

（…？！？！？）

その直後レオンの心臓は物凄く飛び跳ねた。

（なななな・・・）

物凄く混乱して頭の中は真っ白だった。

その間にレオンの背中にはティファの少し豊満な胸が密着していた。

（・・・今夜・・ね、寝れるかな・・・）

と思ひも、別の考えがよぎる。

（・・・明日無事に起きればいいけど・・・）

ティファ脳ではレオンの首に少し当たつておつ、こつ首を絞められ  
そうか心配だつた。

（・・・・・・・・・・・）

しかし、実はティファは起きていた。

(・・・仲間を大切に・・か)

そうしてティファはレオンに抱きついた。

(・・・あの人も・・博士も・・そう言っていた・・)

ティファは額をレオンの背中に当てた。

(・・・レオ・・。あなたが私を守るのなら・・・・私も・・・守る)

そうして眠りについた・・・

次の日の朝・・・・レオンはと言つと・・・

「大丈夫?」

「・・・なわけないだろ・・・・」

レオンは結局一睡もできず、田の下にはぐまができて、物凄く眠そ  
うだつた・・・・

「・・・・レオはまだ寝ていいわ・・・。私は少し外に出てる

「ああ・・・。やつする・・・」

と、気を失ったかのようにしてレオンはぱたりと倒れて眠った・・・

「・・・少し・・・やつすぎたかしら・・・」

ティファはレオンを一警して、ドントの外に出た・・・

朝日が差して、ティファは腕で目を庇つた。

「・・・これで・・・いつかは余りますか・・・博士」

ティファは聞くとは思わないが、どこかにこるロイに声をかけた・・・

Story 8 仲間（後書き）

どうも最近感想が少ないような気がします・・。

「どうあれ、ここで休憩するか」

と、レオンは湖の近くにジープを止めた。

「ここでの点検をしておほか・・。ティファはその間に水を汲んでくれるか?」

「仕方がないわね」

と、一人はジープから降りると、レオンは道具を手にしてジープのボンネットを開けて、ティファは荷台に乗せてあるポリタンクを持って湖に向かった。

「これでよし、と

しまじく点検をしてレオンはボンネットを閉じた。

「・・・それにしても・・・ティファのやつ遅いな

水を汲むだけならすぐに終えるはずだが、まだ帰つてこない。

「 . . . . . 」

レオンはティファが行つたまゝへこりひどいと・・・

ドォンツ・・・!

「 ! ? 」

すると、湖から爆発音がした。

「 ティファ・・・ 」

レオンはすぐに湖に向かつて行つた・・・・・

少し前・・・

ティファは湖の水をポリタンクに入れていた。

「 . . . . . 」

すると、ティファは辺りを見回し始めた。

「 せつときからじつやうと見てないで、出きたらひづなの 」

と、ティファはとつれこ立ち上がると、後の木に向かつて叫びた。

「・・・ふーん・・。前よりかはよくなつたわね・・

すると、木の陰から一人の女性が出てきた。

金髪のショートヘアをして、瞳の色は黒で、背丈はティファと同じぐらいだった。

「何者だ」

「・・やれやれ・・・。あの施設から追放されてから・・・もう逃れたの・・ティファ」

「・・・なぜ私の名前を

「そりゃ知っているわよ・・・。施設には一緒にいたからね」

「・・なに・・?」

「・・・忘れたの?・・・この私・・『ミーナ・ランスター』を

「・・・ミーナだと・・?」

「思い出したよね・・。久しぶり、ティファ」

「くつ・・。お前にそんなことを言われる筋合いはない

「・・ふーん・・。しばらく見ていないうちに・・・結構変わったわね。施設にいた頃のあなたはそんなに強気じゃなかつたのに」

「・・・・・・・

「まあ、悪くはないわね」

「……そんなことよつ……お前がなぜここに……」

「……決まっているでしょ……あなたのEISを奪いに来たの」

「なつ……」

すると、ミーナは左腕にEISアーマーを開いて、手にしていたライフルでティファに向け放った。

「ぐつ……」

ティファはさといで横に避けると、EISを開いた。

「わうーなくひぢゅ」

すると、ミーナも完全にEISを開いた。

そのEISは結構異彩を放っていた。

全体的に形状は細く、従来のEISよりも軽量化されていた。カラーリングは黒をメインに黄色や白があり、頭のデバイスは飾りがついた冠のようなものであり、背中には先端が二つあるマントがついていた。手には結構大きなメイス『ナイトメアズソウル』を持つていた。

道化師をイメージさせるEIS……『ナイトメア』である。

「ぐつ……貴様もEISを……」

「HJDを奪うの、HJDを使わなこでどうやって奪つていいのか？」

ミーナは手にするメイズでティファに攻撃してきた。

「ぐつー。」

ティファは回避しながら右手に『アサルトブレード』を開いた。

「はあああああっー。」

そしてティファはアサルトブレードを振り下ろした。

「なつー!?」

しかし攻撃は直撃したかと思われたが、同時にナイトメアが消えた。

「残像ー!？」

「遅い」

そしてミーナはティファの背後から攻撃してきた。

「ぐあつー。」

ティファは体勢を崩しそうになるも、何とか保った。

「ぐつー。」

ティファはそのままアサルトブレードを横に振るつも、残像を切つ

ただけだつた。

「それで切つたつもり？」

そしてミーナはまたティファの背後から攻撃した。

「ぐつ・・・」

そしてティファはそのまま前に飛ばされながら倒れた。

「ナイトメア・・・その名の通り・・・悪夢を見せてあげる」

そして倒れたままのティファにミーナが向かっていく・・・

「ビームナックル」

すると、木々からEISを身に纏ったレオンが飛び出し、ミーナに向けビームナックルを向けた。

「！？」

ミーナはとつやにメイスを前に出して、ビームナックルを防いだ。

「ぐつ・・・」

レオンはそのまま後ろに下がり、ティファの元に向かう。

「大丈夫かティファ」

「え、ええ・・・。なんとか」

ティファは何か立ち上がった。

「馬鹿な・・・HSを操れる男がまだいたの・・・」

ミーナはレオンがHSを握っていることに驚いていた。

「てめえ・・・これ以上好き勝手にさせないぞー。」

ヒ、レオンは背中のキャノンを展開して、ミーナに向けて放つ。

「ふつ」

しかしエネルギー弾はナイトメアの残像を撃ち抜いただけで、残像はそのまま消えた。

「なつ、なにー?」

「左かひへぬわレオー。」

「くつー。」

レオンはとつとつ左のまつを向いて、左肩のシールドを前に出した。

すると、ナイトメアのメイスがシールドに直撃する。

ミーナは舌打ちをすると、そのまま後ろに下がる。

「お前は一体何者だ！」

レオンはミーナに向け叫んだ。

「私？・・・悪の秘密結社・・・『ファンタムタスク亡國機業』・・・その一員よ」

「あ、悪の秘密結社だ！？」

「馬鹿馬鹿しいでしようが、その歴史は古い組織よ」

「ぐつ・・・」

そしてナイトメアが迫ってくる。

レオンとティファはキャノンを展開して応戦するも、ミーナは残像で避けていき、攻撃を仕掛けってきた。

「ティファ・・・。」「じゃ動きにいく・・・。一旦森から出ぬ

「わかった」

そしてティファとレオンはそのまま後ろに下がって、森を出た・・・

「馬鹿め・・・。」のナイトメアの真の恐りしさを自分から味わいにいくなんて・・・」

ミーナの口元が釣り上がる・・・

そして一人は森から出て広場に出た。

「ティファ・・・。なんとか相手の動きを鈍らせないと」

「分かっている・・・。でも残像ができるほどどの速さの相手にどう動けば・・・」

「なら・・・俺に考えが 」

すると、レオンが横から攻撃を受けて吹き飛ばされた。

「ぐつー!？」

「レオー!」

するとティファの横からナイトメアが迫ってきた。

「くつー!」

ティファはとっさに左腕のブレードを開いて、ナイトメアに切りかかる。

しかし、ナイトメアは切られる同時に消えた。

「・・・。」

そして背後から攻撃を受けた。

「！」のひー。」

吹き飛ばされたレオンは立ち上がると同時に背中のキャノンを放つ。  
しかしそれは残像を撃ち抜いただけだった。

「ふん・・」

そしてミーナはレオンの右側からメイスを叩きつけた。

それによつてレオンは地面に倒れた。

「・・・このナイトメアに広い場所で戦うなんて・・・笑止千万」

すると、ナイトメアが三体に分身した。

「なつ！？」

ティファが驚いているうちにミーナはティファに襲い掛かってきた。

「悪夢を見せてあげて・・・ナイトメア」

そして三体がかりでティファに襲い掛けた。

「ぐつー。」

分身下三体のナイトメアにティファはなす術がなかつた。

そしてナイトメア三体同時の攻撃で、ティファは上空に舞い上げら

れた。

「ぐはっー。」

その衝撃でティファの息が詰まる。

「吹き飛べ」

ミーナは素早くティファの横に行くと、横腹にメイスを叩きつける。

「ぐっ・・・！」

「泣き叫べ」

飛ばされるティファの前に素早く行き、メイスで上に叩き上げる。

「ぐはっー？」

「砕け散れ」

そしてミーナは上空に上がり、ティファにメイスを力強く腹に叩きつけた。

「がはっー？」

「必殺ファンクション」「

そしてそのままティファは地面に強く叩きつけられた。

『アタックファンクション・・・デスサイズハリケーン』

すると、ナイトメアはその場で回転し始めて、メイスの先端に黒いエネルギーを溜めた。

そして力を溜めて、メイスを振るうと、先端に溜めた黒いエネルギーをティファに向け放った。

そして黒いエネルギーはティファの近くに落ちると、そのままエネルギーが膨れだし、ハリケーンの如くティファに襲い掛かった・・・

「ぐ・・・ぐう・・・」

体中から痛みが遅い、ティファは動けなかつた・・・。

フェイクライドはかなりの損傷を受けていた。

「さてと・・・もう抵抗はできないわね」

と、ティファの近くにミーナが下り立つた。

「これの出番ね」

すると、ミーナは左手にある機械を取り出して、それを展開すると四つの足が出てきた。

「な、何を・・・する気だ・・・」

その間にもミーナはその機械をフェイクライドの胴体に設置した。

「うううううううう！」

すると、ナイトメアの指で鳴らした。

「……ぐつ！？……ぐああああああつ！」

その瞬間、ティファの身体に電気に似たエネルギーが流れ、激痛が走る。

「さて……これで終わり」

しばらくしてミーナはその機械をティファから外した。

「ぐ、ぐう……。そんなもので……私を止められると……」

と、立ち上がりつつあるが……

「ふん……。丸裸のあなたに何ができるって言ひの」

「……なに……？」

そして、ティファは違和感に気付いた。

ティファの身体には、フロイクライドがなかつた……。

残っているのは服を量子変換されて着ているエスースのみだった。

「エスがない！？」

ティファアが混乱していると・・・

「あなたの探し物はこれかしら?」

すると、ミーナの左手には、光り輝くHISのコアがあった。

「HISイクライドー? 一体どうやってー?」

「『剥離剤』<sup>リムーバー</sup>・・・ HISを操縦者から強制的に引き剥がす秘密兵器よ・・・見れてよかつたわね」

「ぐつー・・・それを返せつー!」

と、ティファアはミーナに向かっていく。

「馬鹿め・・・」

ミーナはティファアを足で蹴り飛ばした。

「ぐつー?..」

そのまま後ろに飛ばされて地面に呑みつけられた。

「HISのないあなたに何ができるの・・・」

「ぐつー?..」

ティファアは奥歯を噛み締めた。

「これ貰つていくわよ。。。ロイ・ラングレン博士の手をね

「なつ！？博士を知っていると言ひつか！」

「当然よ・・。亡国機業は博士の持つ技術を欲しているもの・・。  
今も博士の行方を追っているわ」

「お前たちなんかに博士が捕まるものか！」

「・・・ふーん・・。今思えば落ちこぼれだったあなたには、博士のI.Sは勿体ないわね」

۱۷۰

「それに、そんなやつなんかを思つたつて、何があるのかねえ」

「・・・つー博士を毎日するなあつー」

と、ティファは怒りを露にしてミーナに向かっていく。

「ニセコ」

そしてミーナはメイスを振り上げた。

ପାତ୍ରବିନ୍ଦୁ

するとミーナの左側からレオンが突っ込んできた。

「？」

リーナはさすがに回避できず、レオンの突進を受けた。

「ナイフアに手は・・出せねえー。」

そしてレオンはナイトメアの両腕を掴んだ。

「…?・・・な、何を・・」

「」の距離なり・・・」二つは避けられまい。

すると、背中のキャノンを展開してリーナに向けた。

「・・・?あなたも・・ただじやすまないわよ」

「やのつもつれー。」

そしてキャノンのエネルギーを充填した。

「へりんつー・・・メガショットー。」

そして至近距離でキャノンを放つと同時にレオンはナイトメアの腕を離した。

「…?」

そしてエネルギー弾はナイトメアに直撃して、爆発した。

「ぐつー。」

しかしその爆発でレオンは少し吹き飛ばされる。

「・・・つー?」

すると、背後から攻撃を受けた。

そこには、やつれまでレオンの前にいたはずのミーナだった。

「残念だつたわね・・・結構いい作戦だつたのに」

「ば、馬鹿な・・・なんで・・・」

「・・・確かに・・・攻撃が当たる直前までは本物よ・・・でも、手を離したのは・・・大きなミスだつたわね」

「・・・くつ・・・」

「当たつたのはナイトメアの残像よ・・・でも、さすがに私も冷や汗かいたわ。本当にギリギリのタイミングだつたし」

見ればナイトメアの半身が若干こげていた。

「・・・・・・」

レオンはティファを守るようにして前に出る。

(・・・どうする・・・渾身の一撃を放つた後じや・・・ヴァイスハイトのエネルギーは・・・でも後ビームナックルを放てるかどうか・。でも当たらないと意味がない・・・どうする)

レオンは構えた。

「わへ・・・。つこでだし、あなたのヒヒもいただくとしようつかな」

そして肩に担いでいたメイスを構える。

「へへ・・・」

「チヒストオオオオオツ！」

「「「！」」「」

すると、どこかで聞き覚えがある叫びがして、森から誰かが飛び出してきた。

そしてその者は手にしていた刀を振り下ろした。

「ちッ！..」

ミーナはさすがに避けるが、振り下ろされた刀身はナイトメアのマントを切り裂いた。

そしてその者は地面に着地すると、白銀の髪が田を舞う。

「何者だ」

その者はゆっくりと振り向く。

「その二人は私の恩人・・・死なせるわけにはいかない」

そして手にしている『獅子王剣・真』をミーナに向け構えた。

「我が名は葛二原・明日羽・・・我は・・・悪を立つ剣なり!」

と、その者・・・明日羽は前口上を高らかに言つた。

「あ、明日羽!?」

レオンは意外な人物の登場に驚いていた。

「お久しづりです・・レオン殿・・ティファ 殿」

と、明日羽はレオンとティファに向く。

「な、なんで明日羽が!?」

「話は後です」

と、明日羽はミーナに向き直る。

「ふーん・・・。助つ人の登場つてやつ?・・でも、生身に人間に何が・・」

「ふつ・・。いつ私が生身の人間だと言いましたか?」

「なに?」

すると、明日羽は左腕を上げると、手首には青と黒の腕輪があつた。

「ま、まさか・・・それは・・・」

「今こそ発動の時・・・師匠の魂を受け継いだIS・・・『かみかぜ神風』！」

すると、明日羽を光が包み込んだ。

「くつ・・・まさか・・・ISを持つているやつがまだいたなんてね」

そして光が晴れると、明日羽はISを身に纏っていた。

全体の形状は『打鉄』に酷似していたが、ほとんどの箇所が全く異なるパーツになっていた。両肩の浮遊ユニットは通常より大型化されており、鎧武者の肩の鎧を模しており、足の脛まで伸びるサイドアーマーの変更はないが、六本の刀が表面にマウントされていた。頭のデバイスは三日月を模した角飾りで、全体のカラーリングは黒だが、各所に青が施されていた。背中には獅子王剣・真の鞘が背負われており、右手に刀を持っていた。

明日羽の師匠の魂を受け継いだIS・・・『神風』・・・

「あ、明日羽も・・・ISを持っていたのか」

「ええ。話は後です」

そして明日羽は獅子王剣・真を構えて、ミーナに向かっていく。

「中々珍しいISを持っているようだけど・・・」のナイトメア

に勝てると思つてゐる」

するとい、ナイトメアは三体に分身して、明日羽に向かつて行つた。

「分身か……だが、実体は一つ……」

明日羽の周りを回るナイトメアに、明日羽は目と闇じて、耳を研ぎ澄ました。

「戦闘中に目を開じるなんて……とんだ馬鹿ね」

そしてナイトメア三体は明日羽に襲い掛かつた……

「……見切つた！」

すると、明日羽は目を開けて、明日羽の前から襲つてくるナイトメアに切りかかった。

そして刀はナイトメアに直撃した。

「な、なにっ！？」

ミーナは見破られたことに驚いていた。

「ば、馬鹿な……。ナイトメアのイリュージョンを見破れるわけが……ない」

「愚かなのは貴官のまつだ」

「……？」

「三体に見えても……実体は一つだけだ……。同じように動いて見えて、動きを集中してみれば先導して一機が先に飛び出していることが分かる……。それが実体だ」

「ま、まさか……こんな短時間でナイトメアの動きを見切つたつて言つの……。ありえない！」

ミーナは明らかに動搖していた。

「この世に完全無欠な物などない……。必ず欠点があるー！」

そして明日羽は『瞬間加速』を掛けて、ミーナに向かっていき、獅子王剣・真を振り上げる。

「獅子王剣……一閃切り！」

そして刀身は振り下ろして、ナイトメアに斬りつけた。

「ぐつー？」

ただでさえ軽量化されているナイトメアは大ダメージを受けて、後ろに飛ばされるも、ミーナは何とか体勢を保った。

「くつー。ただの斬撃でここまでダメージだとー？……ただのヒツでないな」

「言つたはずだ……。この神風は師匠の魂を受け継いだ、と

「馬鹿馬鹿しい……。そんなことなどありえない！」

「・・・それを信じるかは人それぞれだ・・・。だが・・・、私の役  
田は果たした」

「な、なに・・?」

そしてミーナはまつとした。

左手にはフュイクライドのコアが無くなっていた。

「ま、まさか!?」

ミーナはとつぜん明日羽を見ると、明日羽の左手には、フュイクラ  
イドのコアがあった。

「それを奪い返すために・・・あの攻撃を」

「そうだ・・。ティファ 殿の大切なものを奪われたままにはしない」

(・・もしもしあいつがコアを奪還することを優先じゃなかつたら・・・  
私はもう倒されていた!?)

ミーナはまづとした。

そして、明日羽はティファ のまづを向いた。

「ティファ 殿!」

そしてフェイクライドのコアをティファ に投げ渡す。

「あつ・・・」

ティファはその口元をキャッチした。

「・・・来い・・・フロイクライドー。」

ティファが名前を叫ぶと、コアが輝きだし、ティファはヒルを身に纏つた。

「よかつたな・・ティファ」

「レオ・・・」

そしてティファとレオンは明日羽の隣に立つ。

「セレヒ・・・。まだやるのか」

と、明日羽は刀の剣先をミーナに向ける。

(・・・さすがに三対一じゃ分が悪すぎるか・・・。それにナイトメアもこれ以上のダメージを受けるわけにはいかないわ)

と、ミーナはメイスを肩に担ぐと・・・

「・・・今日は・・・退いてあげるわ」

と並んで、ミーナは後ろにジャンプすると、そのまま消えていった・

・

と、レオンが追いかけようとすると・・・

「レオ・・・。追わなくともいい」

「・・・だ、だけど」

「どの道追撃をするだけのエネルギーはないわ」

「・・・」

明日羽の神風は大丈夫だろうが、ヴァイスハイドとフェイクライドはもうエネルギーが残ってはいない

「・・・わ、分かった・・・」

そうしてレオンは立ち止まつた・・・

「しかし・・・。どうして明日羽がISを持っているんだ?」

少ししてレオン達はジープを置いている場所まで来た。

「このISが私の元に来たのは師匠が亡くなつて数週間後のことでした・・・。その時にとある研究所から師匠からの遺産として、神風を渡されたのです」

「遺産？」

「ええ・・・。この神風には師匠のモーションパターンを取り込んでおり、それをサポートシステムに転用したプログラムが入っているのです」

「なるほど・・・。だから魂を受け継いだって言つて居るのか

「ええ」

「・・・それにしても、明日羽はなんで俺たちを追つてきたんだ？」

「・・・あの後私は村人の恩を返して、それから一人を追う形で旅を再開して、こうして一人と再会しました」

「いや、俺が聞きたいのは・・・」

「理由は・・・一人がよければですが・・・」の私を旅のお供にさせてください！」

と、明日羽は土下座して頼み込んだ。

「あ、ちよ、ちよっと、そんなにしなくても・・・って、どうして俺たちと・・・」

「私はずっと、旅を共にする仲間が欲しかったのです

「仲間？」

「ですが、私と共に旅ができるものは少なかった・・・。ですが、

レオン殿とティファ殿となり、ビリヤードもお供しましょ！」

「・・・明日羽・・・」

そしてレオンはティファをチラシと見る。

するとティファはため息をついて・・・

「・・・別に構わないわ・・・。仲間が増えても」

「・・・分かった・・・。明日羽・・・俺たちと一緒に来るか？」

「喜んで！我が剣術を役に立てれば本望です・・・共に参りましょう」

と、明日羽は一気に立ち上がった。

「ああ。明日羽・・・お前は今日から俺たちの仲間だ」

「はいー。」

(・・・仲間が増える、か・・・。でも、悪くない・・・)

そうして、新たに明日羽が仲間になつた・・・

「ぐつ・・・やつてくれるね・・」

ミーナは木にもたれかかった。

「・・・・・」

そして、手からいきなり一枚のカードを出した。

「・・・『愚者』の逆位置・・・軽率・・・か」

カードにはその記されていた。

「・・・悔っていたのは・・・私の方か・・・」

そうして、ミーナは歩きだした・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3273x/>

IS - インフィニット・ストラトス - 三種のISを操る者 アナザーエピソード  
2011年10月30日14時17分発行